

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



CONTENTS

2013年度神奈川大学非文字資料研究センター・ソウル市立大学都市人文学研究所・上海師範大学都市文化研究センター共催 第1回公開研究会	水辺の生活環境史 北九州若松湾における船上生活者の歴史の変容(その2)…… 田上 繁	30
第1回アジア都市フォーラム「アジア都市研究:回顧と展望」	東アジアの租界とメディア空間	30
2013年度非文字資料研究センター・神奈川大学図書館共催 第1回公開展示・第2回公開研究会	戦後初期の香港におけるグラフ雑誌の出版状況についての覚書	32
研究会報告	—『東風』画報と『亜州』画報を中心に—	32
『東アジアの租界とメディア空間』研究会	『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究	34
東アジアの租界とメディア空間	ミュンヘンとウィーン—18世紀ヨーロッパにおける二つの首都の肖像—	34
『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』研究会	海外神社跡地から見た景観の持続と変容	36
中島三千男著『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』をめぐって	旧トラック諸島の神社跡地	36
研究調査報告	研究エッセイ	38
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	利他的行動は複雑なシステムを攻略するカギになるか?	38
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	山本志乃著『女の旅—幕末維新から明治期の11人』(中公新書)	40
台湾における海外神社跡地調査	■受贈図書一覧	41
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	■主な研究活動	43
台湾中部の海外神社跡地を訪ねて	■Information	44
	大里浩秋・孫 安石	16
	橋川俊忠	18
	橋川俊忠	20
	津田良樹	23
	中島三千男	26

2013年度
 神奈川大学非文字資料研究センター・
 ソウル市立大学都市人文学研究所・上海師範大学都市文化研究センター 共催
第1回公開研究会

第1回アジア都市フォーラム 「アジア都市研究：回顧と展望」

日 時：2013年5月29日～6月1日
 場 所：ソウル市立大学 国際会議場
 後 援：韓国研究財団 (NRF) 孫 安石 (非文字資料研究センター 研究員)
 中村 みどり (早稲田大学 准教授)
 石川 照子 (大妻女子大学 教授)

第1回アジア都市フォーラムの参加報告 —ソウルの都市研究で考えたこと

孫 安石

2013年5月29日から6月1日の日程で、韓国のソウル市立大学国際会議場において開催された第1回アジア都市フォーラム（神奈川大学非文字資料研究センター・ソウル市立大学都市人文学研究所・上海師範大学都市文化研究センターの共同開催）の開催経緯と日程については、会議の事務局を担当したソウル市立大学都市人文学研究所の正式な会議報告または http://ihuos.uos.ac.kr/temp14/ihuos_2010/main.jsp などへの掲載に委ねることにし、ここでは筆者が、今回の会議に参加しながら感じたことを幾つか書き留め、今後の都市研究を目指す研究者の一助になることを願う（大会プログラムについては表1を、個別報告については同号掲載の中村氏、石川氏の報告を参照のこと）。

世界経済のグローバル化が叫ばれて久しいこのごろ、

その動きに最も対応が遅いと思われた人文学分野（一先ず、史学、文学、哲学）の対応もいよいよ待ったなしの状況を迎えている。例えば、筆者が専門とする人文学の歴史学においてもその変化は例外なく押し寄せており、中でも「ジェンダー」、「環境」、「都市」研究の分野は、多くの新しい研究成果を生み出しているように思える。

同じ職場の同僚で朝鮮近現代史や日朝関係史を研究するY先生は、人生の先輩でもあり、学内の共同研究を進める仲間でもあることから、研究会は勿論、宴席でも一緒にすることが多いが、本人の研究範囲の中でも最もカバーできていない箇所は、朝鮮のジェンダーに関連する部分であることを、幾度か口にするのを聞いたことがある。同じ反省は筆者にも当てはまるもので、中国史や都市史研究において今後ジェンダー分野の不勉強を補うしかない。また、環境問題については春と冬に黄沙とPM2.5が話題になる度に、これが一国の問題だけではなく、東アジアという地域を巻き込んだ研究と対応が必要であることを思い起こさせてくれている。これに福島



写真1 フォーラム閉会後の記念撮影



写真2 フォーラムの論文集・表紙

表1 大会プログラム

第1回アジア都市フォーラム 「アジア都市研究：回顧と展望」 Asian Urban Research: Retrospect and Prospect

5月30日 セッション1：アジア都市研究の展望

- (1) 大里浩秋 (神奈川大学) 『上海租界研究：台湾國史館所蔵資料の紹介』
- (2) 楊劍龍 (上海師範大学・中国) 『中国の都市化過程と都市文化の研究』

セッション2：都市の経験と認識

- (3) 孫安石 (神奈川大学) 『上海の日本語新聞『上海日報』(1929年)が見た日中関係』
- (4) 石川照子 (大妻女子大学) 『日本人女学生の第一次上海事変体験—上海日本高等女学校校刊の考察—』
- (5) 中村みどり (早稲田大学) 『留日中国人作家の東京・上海文学地図—陶晶孫の活動』
- (6) 林春城 (木浦大学・韓国) 『The Topographical Map and the Identity of the Chinese Urban Film』
- (7) 金承郁 (ソウル市立大学・韓国) 『Spatial Perception of Koreans Residents on Shanghai in the Early 20th Century』

5月31日 セッション3：都市住民と都会の変遷

- (8) 銭杭 (上海師範大学・中国) 『現代都市住民の伝統への追求』
- (9) 張貞娥 (仁川大学・韓国) 『From Squatter Area to ‘Wonderland’ of Cultural Heritage: The case of Sham Shui Po in Hong Kong』
- (10) 李培徳 (香港大学・中国) 『The Historical Memory of Shanghainese in Hong Kong : Nostalgia, Cultural Identity, and Network Weaving』
- (11) Helga-Jane Scarwell, D. Leducq, D. Tran Dinh (リール第1大学・フランス) 『How Greater Hanoi, a Regional City in Transition, Manages the Implementation of Sustainable Development?』

セッション4：都市と地域社会

- (12) Patrizia Ingallina (リール第1大学・フランス) 『Innovation Clusters and Universities Reorganization in the Greater Paris』
- (13) 南榮浩 (ソウル市立大学・韓国) 『“Where is My Village?” : Urban Village Movement, Identity Building and its Boundaries in a Downtown District of Seoul』
- (14) 彭善民 (上海師範大学・中国) 『NPO and the Juvenile Social Education of the Underlying Immigration』
- (15) 鄭聖勲 (ソウル市立大学・韓国) 『Intimacy and Publicness in Urban Communities』
- (16) 洪準其 (ソウル市立大学・韓国) 『Lacan’s Topology: Joyce’s Symptom/Sinthome and Placeness』

総括 金承郁 (ソウル市立大学都市人文学研究所・韓国)、楊劍龍 (上海師範大学都市文化研究センター・中国)、孫安石 (神奈川大学非文字資料研究センター)

原発問題が加われば、環境問題がすでに一国やアジアだけではなく、世界を巻き込む重大な問題であり、まさにグローバルな対応が求められていることが良く分かる。そして、1980年代に中国が世界経済に門戸を開いてから約30年が経過したいま、我々は北京、上海、広東、重慶、武漢など次々と登場する巨大都市の誕生を目の当たりにし、中国、ひいてはアジアの都市問題にどのように対応すべきか、様々な模索が試みられているように思われる。東京、ソウル、北京、上海という巨大都市がそ

れぞれ抱えていた固有の都市問題は今までは主に都市工学や都市計画、建築という理工系の共通テーマとして取り上げられる場合が多かったと言える。しかし、経済のグローバル化と共に都市に集中する人口が急増し、巨大都市が抱える問題は人文学の共通のテーマとして登場しつつある。

このような変化を最も鋭く察知し、「都市」研究において新たな地平を開こうとする試みの一つが、韓国のソウル市立大学による「都市人文学」という学問分野を定



写真3 『都市人文学研究』の表紙(左)とタイトル(右)

着させる試みであろう。今回のソウル会議に参加した時に、ソウル市立大学の都市人文学研究所の事務局の皆さんの話をうかがったところ、2008年から始まった都市人文学という研究分野は韓国政府の人文韓国(韓国ではHK研究と呼ばれる)プログラムの採択によって本格化し、2017年までの10年間という長期計画の下に研究が推進されているという。目論みは大きく、歴史学、哲学、文学と並んで「都市人文学」という研究分野を学問

表2 タイトル(日本語訳)

都市人文学叢書1—都市空間の人文的模索
都市人文学叢書2—都市空間の形成原理と都市市民の生活
都市人文学叢書3—都市の生活と文化
都市人文学叢書4—グローバルボリスの両家性と都市人文学の模索
都市人文学叢書5—ローマ共和国とイタリアの都市—統合と組織の歴史
都市人文学叢書6—都市空間のイメージと想像力
都市人文学叢書7—ヴァルター・ベンヤミン—モダニティと都市
都市人文学叢書8—現代哲学と社会理論の空間的旋回
都市人文学叢書9—経済超越者と都市研究
都市人文学叢書10—都市と権利
都市人文学叢書11—都市の中の歴史
都市人文学叢書12—現代思想と都市
都市人文学叢書13—都市—象徴・資本・公共性
都市人文学叢書14—都市・性・愛
都市人文学叢書15—都市・人間・人権

の一分野として位置づけることというから、その試みは極めて大きい。そのための準備も着々と進んでおり、例えば、2008年に第1回目を開催した「都市人文学フォーラム」は2013年4月現在で合計35回の開催を積み重ね、韓国の国内学術大会は合計9回にのぼり、これらの会議とシンポジウムの記録は、『都市人文学叢書』として合計15冊が刊行されているという。また、年に2冊の学術専門の雑誌『都市人文学研究』を発行し、2013年4月号の第5巻1号までを刊行しているというから、この都市人文学研究に取り組むソウル市立大学の取り組みがなかなか本格的なものであることが伝わってくる(【写真3】の表紙とタイトルを参照)。

このような都市研究がその他の大学や地域の文化館、市立の博物館を巻き込みながら拡大されていく動きも注目している。たとえば、2011年3月にはソウル市清溪川文化館で「京城1930年」と題する展示会が開催され(同年10月には駐日韓国大使館東京文化院でも開催された。詳細な紹介はNews Letter『非文字資料研究』、第28号、2012年7月を参照)、2012年2月には「ソウル歴史博物館」にて1950年代から60年代に至る間のソウルを代表する繁華街を取り上げた展示「明洞ものがたり」(MYEONG-DONG NARRATIVES)が開催された。明洞という街はもともと朝鮮時代には漢陽の「南村」と呼ばれた地域で、1910年の植民地時期には日本人の居住地に隣接していたことからソウルを代表する繁華街として発展した空間であった。ところが、1950年の朝鮮戦争で明洞聖堂の周辺ごく一部を除き、灰燼に帰した街に画家、演劇人、音楽家が集まりソウル屈指の芸術の街として復活し、1970年代から80年代までは韓国の民主化運動を象徴する街として再び脚光を浴びるようになった。このようなソウルの都市の変容を人々はどのように記憶すべきか、を問いかけるこの展示は、現代化をひた走るソウルの人々に大きな反響があった、と聞く。このような試みはソウル市立大学にも継承され、2013年6月5日～9月30日の間にはソウル市立大学の博物館にて写真展『1950's ソウルの記憶』が開催された。展示はまだ一般公開されていない時期であったにもかかわらず、筆者は海外からの研究者という理由でカラーのスライドフィルムに取まった1950年代のソウルを撮影した作品100点余りを鑑賞する機会を得ることができたが、それは正に朝鮮時代の遺構が残る街並みに日本の植民地とアメリカの支配が共存するソウルの街並みであったことが強烈な印象で残っている。



写真4 『1950's ソウルの記憶』の図録表紙(ソウル市立大学博物館)

勿論、すべてが順調にいったる訳ではなく、中でも学内組織の「ソウル学研究所」と「都市科学研究院」とのすみ分けは大変らしい。ソウル学研究所は、ソウル建都600年を記念して1993年にソウル市の支援の下に結成された組織で、「都市ソウル」そのものを研究対象にするものであることから、各種のシンポジウムや研究成果の発表などにおいても「都市人文研究」との重複は避けられない。おまけにソウル学研究所が発行する機関誌の『ソウル学研究』は2013年9月現在で合計第52号を数えているから、当然その効率性が問われることになる。



写真5 ソウル市立大学・第27回都市科学共同作品展(2013年5月30日)



写真6 ソウル市立大学の建築工学を専攻する学生の卒業作品(2013年5月30日)

さらに、分が悪いことに、ソウル市立大学の中には「建築」を中心とした従来の都市研究を拡大したもう一つの研究機関「都市科学学部」と「大学院」が並存しているという。こちらは都市行政、建築工学、都市工学、交通工学、環境工学、空間情報、都市の防災など従来の建築を基盤にしたカリキュラムをもつ教育・研究組織であるから、混乱はさらに大きくなる(写真5、写真6を参照)。

今回の訪問でも、各先生方は研究対象が重複する部分で最も苦慮するところであることを認めていたのも事実である。しかし、それとは反対にお互いが切磋琢磨する努力を積み重ねるきっかけになっていることも話されているから、その点は頼もしい。

ソウル市立大学が推進している都市人文「学」の成立の試みは、恐らくは時間の経過と共に解体と再構築を余儀なくされるだろうことはだれもが予想できよう。しかし、その中で新たな都市研究を目指す実験が大いに成果を上げられることを期待したい。また、それに協力していきたい。

「The 1st Asian Urban Forum」 —アジアにおける都市研究の交流—

中村みどり

昨年以來、政治面において波風の立つ日韓、日中関係であるが、そのようななか、5月29日から6月1日にかけて、ソウル市立大学都市人文学研究所で韓・中・日三カ国の研究者を軸とする、国際シンポジウム「The 1st Asian Urban Forum」が開催された。アジアの都市研究をテーマとする同シンポジウムは、上記研究所・上海師範大学都市文化研究センター・神奈川大学非文字資料研究センターが持ち回りで担当する学術交流の一環であり、昨年の上海でのシンポジウム「Urban New Media and Modern Shanghai」に続くものである。今回は、香港、フランスの研究者も含め、総勢16名による発表が行われた。本報告では、その中でもソウル市立大学の金承郁氏と上海師範大学の彭善民氏の発表を取り上げ、最後に執筆者自身の発表について触れたい。

「20世紀初頭におけるコリアン上海居留民の空間認識」(金承郁)

1920～1930年代の多国籍都市上海のコリアン居留民に焦点を当て、朝鮮半島における近代都市空間上海の存在意義に関する考察がなされた。

朝鮮半島が日本による植民地支配を受けたこの時期、1930年代までは日本よりも中国に移住する者の方が多かったという。20世紀初頭、朝鮮総督府と南満州鉄道株式会社により朝鮮半島と中国大陸を結ぶ鉄路が開通したことは、上海への人口移動を促した。当時の上海をフランス租界、共同租界、中国人居住地に区分すると、フランス租界に住むコリアン居留民が圧倒的に多く、その背景には、政治活動の自由を認めていた同租界が朝鮮半島独立派の運動拠点となっていたことが挙げられる。一方、共同租界には商人やダンサーなどのコリアン居留民が住み着いた。総合的に眺めれば、当時の朝鮮半島にとって上海とは、日本を宗主国とする「帝国空間」に対抗する「自由な都市空間」であった。

興味深いテーマを明確な論旨で跡付け、アジア各都市のつながりから空間を重層的に捉える金氏の考察は、日中関係と日韓関係を分けて捉えがちな筆者の視野を大きく広げてくれた。

「NPOと上海〈流動児童〉に対する社会教育」(彭善民)

上海のNPOの「流動児童」(「農民工」)の子供、都市の戸籍を持たず、都市に半年以上住む14歳以下の児童)を対象とした活動に関する調査報告が行われた。

2012年の時点で、中国全体の「流動児童」は1830万人以上に上るが、「民工学校」に通う彼らは、好条件の就職や高等教育への道が閉ざされ、社会の不安定要素となっている。上海の3つのNPOでは、①学習面や健康面、職業面での自己管理能力を高める、②合唱団を結成するなど芸術活動を行う、③都市住民としての道徳心を高めるなど、児童たちに対して積極的に社会教育を行い、児童やその親との間にネットワークを築くことに成功していると評価できる。しかし、今後の運営の存続と展開には、政府のNPOに対する一定の予算交付、戸籍に制限される大学受験制度の改善、そして学校教育、家庭教育と社会教育との連携が求められる。

「流動児童」を対象としたNPOの地道な活動に目を向け、その活動を丁寧に紹介した彭氏の発表からは、メディアが報じない日常の視点から眺めた上海の「今」の一面を知り得ることができた。

「〈留日作家〉陶晶孫の東京—上海文学地図」(中村みどり)

1906年から20余年日本に留学した中国人作家・医学者陶晶孫の都市東京と上海における足跡を辿り、「帝國日本」の中で自己を形成した彼が「半植民地上海」の

風景をどのように捉えていたかを考察した。

陶晶孫は日本のエリート教育を受けた知識人であり、彼の東京での住まいや通った学校の所在地を確認すると、皇居周辺を中心部を生活圏としていたことがうかがえる。これに対して帰国後の上海での活動は、日本人居住地、フランス租界、共同租界、中国人居住地を跨ったものであったことに気づく。陶の文学作品の主人公に見られる「彷徨」は、日本留学経験者として中国の現状に向き合う葛藤を表していることについて考察した。

会場からの質疑応答を通して、朝鮮半島の日本留学経験者との類似点、「彷徨」が上海文学全体を貫くキーワードであることを教えて頂き、また研究の過程で作中から陶晶孫の生活感を読み取る必要があることなどをご指摘頂いた。今後の課題としたい。

シンポジウムへの参加を通して強く感じたのは、政治的に困難な時期にこそ、全国各地の研究者が相互尊重の精神でもって交流を重ねることの大切さであり、また中国と他国とのつながりを踏まえてこそ、日本の中国研究も一層深まる、ということであった。最後になったが、シンポジウムの準備を進め、毎回緑豊かな大学の一番奥にたたずむ宿舎まで笑顔で送って下さったソウルの先生方に心から御礼を申し上げたい。



写真7 左から、金承都、中村みどり、石川照子、孫安石(敬称略)

—架橋する都市研究の可能性—

石川照子

2013年5月29日から6月1日の4日間、ソウル市立大学で、国際シンポジウム「The 1st Asian Urban Forum」が開催された。そのベースはアジアの都市研究に取り組む日中韓三国の組織及び研究者によって構成されており、昨年の上海における上海師範大学都市文化

研究センター主催によるシンポジウムに続いての開催であった。なお2014年2月には、神奈川大学非文字資料研究センターが主催して開催する予定である。

今回のシンポジウムには、日中韓以外に香港、フランスの研究者達も参加して、大変多彩なテーマの報告が行われ、活発な議論が交わされた。この小文では、香港大学の李培徳氏と筆者自身の報告について簡単にまとめたと思う。

「香港の上海人の歴史的記憶——ノスタルジア、文化的アイデンティティ、ネットワーク構築——」(李培徳)

香港の上海人たちが、上海の都市生活の記憶と自身のアイデンティティについてどのようにとらえているのか、口述記録、メモワール、個人の伝記等の資料から考察がなされた。

1990年代を迎え中国への返還が迫る中で、香港人の身分という問題が注目されるようになった。一方上海は改革開放以後、社会は発展し経済水準も高まって、その姿は急速に変化していた。それに伴い香港、上海の両都市でノスタルジアという現象が生まれていった。ノスタルジアとは過去を美化することであり、自身のアイデンティティを築く手立てでもある。それは歴史、文学、映画に無限の創造空間をもたらすだけでなく、「香港人」と「上海人」という身分アイデンティティを凝縮する力も備えていた。90年代に出現した「上海ノスタルジア」の対象は、まさに上海が最も繁栄した1930年代の上海だったのである。

李氏は2003年1月から、香港在住の上海人への聞き取り調査を始め、報告では4人の事例を通して、それぞれの経歴と経験・感慨が紹介された。そしてそこから、(上海での)生活経験というものが身分アイデンティティの源であり、生活経験がなければ「アイデンティティ」を求めることはできない、生活経験こそが香港の上海人の上海ノスタルジアの主要な推進力を成していると、結論づけられた。

長期間にわたる地道な聞き取り調査を通して、香港の上海人たちの具体的な証言を考察した実証的な報告であり、かつそれらの証言のディテールが大変興味深く、同様に上海について研究している筆者にとって、大変有意義な報告であった。

「日本人女学生の第一次上海事変体験——上海日本高等女学校校刊の考察——」(石川照子)

本報告では、日本高等女学校が発行した雑誌を手掛かりに、日本人女学生が第一次上海事変をどのように経験し、何を感じたのかという考察を通して、当時上海に生きた日本人たちの「感情」とその特色についての考察を試みた。

日本人学校はみな租界にあつて「治外法権」的自由を享受し、自国の教育体系もそのまま持ち込まれていた結果、日本人と現地中国人との対等な交流は妨げられ、多くの日本人の中国人に対する蔑視と同情の感情を生み出すこととなった。

1931年1月28日、第一次上海事変が始まると、排日運動が上海でも激化して、日本居留民の生活においても脅威を感じるようになった。そして戦争を目の当たりにするという経験は、上海の日本人の生徒たちにも強烈かつ深刻な衝撃を残した。

女学生たちの回想録からは、事変勃発に伴う不安と恐怖、一般中国人への憐れみと同情、中国人便衣隊の恐ろしさと自警団、日本兵の頼もしさと彼らへの感謝の気持ちを見ることができる。また、戦場と化して破壊され無残に変わってしまった上海の光景に心を痛め、自身が育ち暮らしたその上海への思いは残り続けたと言える。

そして3月の停戦を迎えるまで、戦争への嫌悪と批判の気持ちの反面、戦う勇敢な日本兵と勝利した祖国日本に対する感謝と誇りの念を、女学生たちは強く抱き続けていた。

続く質疑では、「軍国少女」の意味、事変に対する日本にいる女学生との反応の違い、上海の日本人の閉鎖性・保守性、上海の日本人の生活の復元による上海研究イメージの如何等の貴重な質問と指摘を頂いた。

ソウルを訪れたこの時期は、一年の中でも最も美しい季節だとうかがった。そんな素晴らしい季節にアジア各国をはじめとする研究者が共に集い、多彩なテーマを通して都市研究の現在を理解し、将来を展望しあえたことは大変貴重な機会であり、日中、日韓といった二国間交流にとどまらず、多国間を架橋する都市研究の可能性というものを実感させられた。

最後に、終始万般行き届いた心遣いを示して下さった、主催校のソウル市立大学の先生方と学生さんたちのホスピタリティに対して、心から感謝を述べたいと思う。

2013年度
非文字資料研究センター・神奈川大学図書館共催
第1回公開展示・第2回公開研究会

戦時下大衆メディアとしての紙芝居 —国策紙芝居とはなにか

【公開展示】

期 間：2013年11月27日（水）～12月11日（水）
会 場：神奈川大学図書館 展示ホール（横浜キャンパス）

【公開研究会】

日 時：2013年12月4日（水）
13:30～17:30
会 場：神奈川大学図書館 視聴覚ホール（横浜キャンパス）

開会挨拶：田上 繁（非文字資料研究センター長）

報 告：「戦意高揚紙芝居コレクションの概要」
（非文字資料研究センター事務局）



第一部 紙芝居実演

- 作品1 「敵だ！倒すぞ米英を」
（神奈川大学放送研究会）
- 作品2 「チョコレートと兵隊」
（神奈川大学放送研究会）
- 作品3 「空の軍神加藤少将」
（なつかし亭・岸本茂樹）
- 作品4 「神兵と母」（なつかし亭・岸本茂樹）

第二部 公開研究会

講 演：「国策紙芝居とはなにか」
櫻本 富雄（作家・元東京学芸大学講師）

公開座談会：「戦意高揚紙芝居コレクションの位置づけを巡って」

- （座談者）**
櫻本 富雄（作家・元東京学芸大学講師）
中島三千男（非文字資料研究センター 研究員）
安田 常雄（神奈川大学歴史民俗資料学研究科教授）
富澤 達三（非文字資料研究センター 研究協力者）

司 会：津田 良樹
（非文字資料研究センター 研究員）

本センターが収集した「戦意高揚紙芝居コレクション」の整理が終了したことを機に、今後の研究資料としての活用方策を探るために、図書館との共催で公開展示・実演会を企画するとともに、本コレクションの旧蔵者・櫻本富雄氏を迎えて、公開研究会を開催した。



写真1 公開展示①



写真2 公開展示③

【公開展示】

本センター所蔵コレクションのうち20作品を選び、原本、作品紹介パネル、関連資料の展示を行った。展示期間の観覧者は100名を超え、お問い合わせも多かったことから、期間を12月20日（金）まで延長した。

【公開研究会】

公開研究会に先立ち、本センター事務局からコレクションの概要説明を行うとともに、神奈川大学放送研究会、なつかし亭・岸本茂樹氏のご協力により、上記4作品の実演を行った。参加者は合計100名を超えた。

戦意高揚紙芝居コレクションの概要（非文字資料研究センター事務局）

紙芝居という大衆メディアには、戦前と戦後に2回の興業上のピークがあったとされる。

戦後は、GHQの占領期1946年から1952年までの7年間くらいが最盛期であったが、紙芝居は子供への悪影響があるとの世論や、それを受けた業界の自主規制、1953年の街頭テレビの登場などがあり、50年代後半にはTVが家庭に普及するにつれて徐々に衰退した。

戦前は、昭和初期に街頭紙芝居が登場し、紙芝居の製

作者と実演者を仕切る貸元集団のもとで大きな興業人気を博した。しかし、1937年の日中戦争を境に戦時色が強まり、1938年には日本教育紙芝居協会という国策団



写真3 公開展示④



写真4 公開展示⑤

体のもとに脚本家や画家も統合され、紙芝居も国家の言論統制の網の中に編入されていく。1940年には大政翼賛会が組織され、大政翼賛会文化部の仕事として児童文化の新体制の構築が志向され、内閣情報局の主導で1941年12月23日に社団法人日本少国民文化協会という組織が創設される。これにともない、日本教育紙芝居協会は、日本少国民文化協会の一部会に吸収される。

このような全てのメディアが高度国防国家の構築を目指す国家の言論統制・検閲のもとにあった時代に大量に制作された印刷紙芝居が、いわゆる「国策紙芝居」あるいは「軍国紙芝居」と称されるものであり、戦争協力の一翼を担ったという嫌疑から、戦後、GHQによる検閲と処分を招くことにつながる。



写真5 公開展示⑥

非文字資料研究センターでは、2012年末、神田の古書市場からカタログベースで「戦意高揚紙芝居コレクション」241点の紹介があり、本センターの資料収集方針に合致するという事で購入を決定した。

本コレクションは、全241点中223点(約93%)が太平洋戦争下の1941～1944年の4年間に刊行され、同じく177点(約73%)が日本教育紙芝居協会ないし日本教育画劇から刊行された作品によって構成されている。

全体的な作品傾向としては、当時の国策的意図が明確に表れているもの(顕現的作品群)と、必ずしもそうではないもの(非顕現的作品群)との割合が相半ばしており、これらを一括して「戦意高揚紙芝居」と称することの適否が指摘され得る。しかし、紙芝居は、個人が黙読で繰り返し読み鑑賞する文学作品と異なり、作品・実演者・聴衆という3者が出会う共同の場で披露され流通する媒体であった。その意味ですべての作品が当時の検閲機関のもとで統制的に出版されてきたものであるという形式的側面とともに、戦時下の民衆レベルにおけるメディアの受容形態(国策への「共感と抵抗」の歴史心理)を分析する研究課題という両面に着目する必要がある、研究対象としてこれを「戦意高揚紙芝居」と称することは妥当性を欠くものではないと考えている。

本コレクションは、納品後ただちに図書館における通常整理、燻蒸・脱酸処理を行い、紙芝居の書誌的情報は、2012年度末から図書館蔵書検索OPACから検索することが可能となっている。次なる段階として、本資料の研究上の活用方策が検討課題として浮上した折しも、本学において「デジタルアーカイブ」プロジェクトが開始され、本センターもそのプロジェクトの一員として参画することとなった。この「デジタルアーカイブ」からは、2013年5月上旬より、日本常民文化研究所と大学資料編纂室のデータベースの一部公開を開始したが、本センターとして、紙芝居資料のデジタル発信の開発に携わるなかで、これまでに「ある程度解決できた問題」、なお「解決に時間を要する問題」、解決の見通しが立たない問題があることに気づかされた。非文字資料研究センターという研究機関としての役割のうち、紙芝居の情報発信に限ってであるが、この点を紹介して概要の説明と問題提起とする。

(1) ある程度解決できた問題：紙芝居資料の分類

図書館OPAC、デジタルアーカイブに共通するシス

テム上の問題として、何らかの検索語を投入しない限りレスポンスを得ることができないという現象を解決するために、資料全体を俯瞰できる補助的な検索手段を提供することが必須と考えられた。紙芝居関係文献を調べるなかで、平林博『紙芝居の実際』(照林堂書店、1943)に、当時の紙芝居分類の体系が示されており、その後の研究文献にも多く引用されていることが判明した。そこでコレクション全体を俯瞰するための手段として、独自の分類体系を考え出すよりも研究者の繰り返しの引用に耐えてきたこの分類体系に基づくことが良策と判断し、これをもとに分類を試みた。『紙芝居分類目録一覧』は、研究会当日配布のレジュメに添付した。

(2) 解決に時間を要する問題：紙芝居のデジタル化と著作権

デジタルアーカイブからの紙芝居資料情報の提供に取り組むなかで、台詞・絵画・音声の3つの素材情報のデジタル化作業と著作権処理の問題に直面した。この点、本センターの取り組みは、著作権保護期間を経過したものと、未だ経過していないものに分け、前者についてデジタル化作業を進めると同時に、後者について著作権者(継承者を含む)への許諾処理を行うという業務に着手したばかりである。また、音声化については、神奈川大学放送研究会に所属する学生の協力を得て、朗読録音を開始したところである。いずれも、かなり長期にわたる作業となることが予測される。

(3) 解決の見通しが立たない問題：紙芝居全国総合目録

解決の見通しが立たない問題とは、紙芝居資料の全貌を把握するためのアクセス手段となる全国的な書誌・所蔵情報に相当するものが作成されていないという問題である。同じ大衆的なメディアである映画・レコード・美術・漫画については、制作・流通・配給・観覧の仕組みが確立していることから、全国的な団体年鑑、大手会社の社史、研究者のアーカイブなどのかたちで情報が累積・整備されている。しかし、紙芝居は、日本教育紙芝居協会によって統合された戦時下の時期以外は、貸元という零細の仕組みのもとで動いてきたこともあり、販売作品情報さえ必ずしも整備されてこなかった。この点に関連して、静岡県立大学国際関係学部の森山優准教授が、2010-2011年度科研費「戦時・戦後期における啓蒙運動とメディア」をもとに、論文「戦時・占領期印刷紙芝居目録」(静岡県立大学国際関係・比較文化研究 Vol.11, No. 2 (2013. 3))を公表しており、こうした先行研究のフォローアップと連携も本センター研究活動の課題

の一つとなると思われる。



写真6 概要説明(非文字資料研究センター事務局)



写真7 会場の様子①

講演：「国策紙芝居とはなにか」(櫻本富雄)

自分が文化人の表現責任を当時の生資料によって証かす仕事を長年行ってきた背景には、長野県小諸市の学齢期の体験が原点としてあります。国民学校4年の後期に、或ることが原因で、教室への入室も友人との交友も禁止という処分(クラス八分)を受け、登校すると校長室に終日立たされ、校長室が使用されるときは畳敷きの裁縫室に移されるという扱いを一年以上受けました。しかし、この屈辱を晴らすには、少年航空兵になって殊勲を上げるしか方法はないと思ひこみ、また、昭和18年の山本五十六海軍大将の国葬を悼む長野支局主催の作文コンクールで一位を取るといような軍国少年でした。

昭和20年、6年生として最高学年の覚悟という作文を書かされ、教員が気に入るような虚偽の転向文を書き、クラス八分は解除されました。

8月に敗戦を迎え、友達の間で「二番目に腹を切って死ぬのは誰か」(一番目は当然校長、二番目は軍事教練の先頭に立っていた体操の教員か、あるいは教頭か)が話題になっていましたが、教員たちは一転して民主教育の推進者になりました。新聞誌上には、戦前の発言を隠す、あるいは最初から戦争反対であったという文化人の言論が掲載されました。



写真8 紙芝居実演(放送研究会)
作品：「敵だ！倒すぞ米英」



写真9 紙芝居実演(放送研究会)
作品：「チョコレートと兵隊」



写真10 紙芝居実演(岸本茂樹氏)
作品：「空の軍神加藤少将」／「神兵と母」

私は、心底からの怒りを覚えました。それは彼らを信じた自分自身への怒りであり、その怒りの正体と客観的に向き合うために、彼ら文化人の戦時中の発言・表現を集めることを決意しました。それが私の仕事の出発点になっています。

昨今の学生は戦争を、歴史を知らないと言いますが、これは戦争を語り継がなかった大人の、そして嘘を教えてきた社会の責任です。

8月15日を終戦記念日として祝うことが報道されますが、日本の敗戦日はミズーリ艦上で重光葵代表が調印した9月2日です。8月6日に原爆を投下された広島の外には、凱旋の塔がありますが、これは明治29年の日清戦争勝利の碑です。8月9日に原爆被害を受けた長崎の平和記念像の製作者は、戦時協力者であった芸大の

先生です。宮崎の八紘一宇の塔は、大東亜共栄圏の各地から持ってきた石で造られたものですが、平和の象徴だと言う。ここには大東亜共栄圏への反省がひとつもないのです。東大で設置を拒否された結果、立命館大学に建てられたわだつみ像を作ったのは、戦争美術展への協力者です。

画家（戦争賛美の絵を描き責任追及されながらフランス人になったフジタツグジ、南洋の黒人の女の子を描く同じタッチで原爆の図を描いた丸木（旧姓赤松）俊）、作詞・作曲家（東条の次は自分かと追及を惧れていた西条八十、多くの軍歌を作曲しながら「ナガサキの鐘」「君の名は」などをつくった古関裕而）、詩人（反戦詩人と評価される一方でヒトラーユーゲント賛美の檄文を書いていた金子光晴）、小説家（戦中住井すゑ子の筆名で「少女クラブ」に天皇に尽くす少女になれと言った小説を書き、佐久良東雄の伝記を書いた住井すゑ）など戦争協力の表現責任を問われるべき人物は、枚挙にいとまがありません。

私は、このような文化人の転向を見て、戦時下の言動を収集して記録することが必要だと考えたのです。小学校6年を修了して、東京の市立二中現・上野高校に入り、葛飾の青砥で自活しながら、村野四郎氏に師事して詩作への志を育てました。

或る時、宮益坂の詩の専門店・中村書店へ行く途中、古道具屋で紙芝居の舞台を見つけ手に取ったら、その中に「椰子の仲裁」（端本）が入っていました。紙芝居は図書の扱いではないので、当時の古道具屋に新聞や雑誌とともに束になって売られていたのです。これが紙芝居収集の切っ掛けでした。

その後幼稚園の経営に関わるなかで、TVカメラで紙芝居を園内放送したりしました。そのような関係で、NHKの全国放送教育研究会の事務局長を任せられ、その活動をしつつ全国の古本屋を回って紙芝居を収集しました。全部で500セットくらい集めましたが、戦時下の印刷紙芝居が一体どのくらい制作されたのか。日本紙芝居協会（京成町屋にあった朝日のダミー会社）の会長であった佐木秋夫という宗教学者は、東京裁判の検事側証人になった人ですが、彼の命令で証拠を隠す為に国策紙芝居を燃やすのに一週間かかったと伝えられています。協会の企画を受け紙芝居を印刷した朝日新聞社のダミー会社・日本教育画劇株式会社も幽霊のように消えてしまいました。こうして国策紙芝居の多くは散逸したため、実態解明が難しいのです。

国策紙芝居にも「七つの石」や「太郎熊と次郎熊」など良いものがあります。しかし、現時点から見て、紙芝居の研究課題として、どういうことが大事か。

一つは、印刷紙芝居の実態の解明ですが、最近、戦時下に発行されていた雑誌『紙芝居』が復刻されましたので、これによって研究を進める新たな環境が出てきました。

二つ目は、紙芝居の脚本家・画家の実態解明ですが、これはなかなか解明の方法が難しいところです。

最後に、なぜ紙芝居にこだわるかをお話して講演を終わります。有力新聞社が紙芝居の制作・販売に関わったのは、政府機関・軍・産業団体・新聞社・各宗派などをスポンサーにして、売り上げが保証されていたからです。紙芝居は、今のマスメディアの代名詞と言ってよいと思います。このマスメディアを利用して国民を洗脳しました。そして戦争の道を突き進んだ代表者なのです。このような役割を担った紙芝居を、現在の時点からあらためて解明することに取り組む若手の研究者、非文字資料研究センターの活動に期待したいと思います。（拍手）



写真 11 櫻本富雄氏

公開座談会：

発言者略称：中島（中島三千男）・安田（安田常雄）・富澤（富澤達三）・櫻本（櫻本富雄）・会場（一般参加者）

中島 公開座談会の司会役を務める中島です。櫻本先生のご講演では、日本の文化人の体質に対する一貫した怒りを発条とした戦時下の言論資料収集のお仕事を紹介されました。あえて纏めることはせず、早速、公開座談会を始めたい。本日は研究者以外の方も多く参加されているので、フロアとの意見交換も重視したいが、最初に、本センターとしての研究課題を明らかにするため、2014年度からの新プロジェクトのチーフとなる安田先生より、その点についてご発議願います。

安田 私は紙芝居の研究プロパーではないが、15年戦争期のメディアの役割に関心があり、当時の映画を中心

にいくつか論文を書いている。本センターが収蔵した紙芝居研究の構えを検討中だが、まずは作者を含めてその全貌が不明であることから、第一段階としては、作家性の問題と聴衆側の受容論から着手する必要があると考えており、現時点での「戦時下日本の大衆メディア」研究の視点として、以下の4点を提起したい。

- (1) 紙芝居の文化特性：文化としての紙芝居の特徴を独立した形で対象化し、昭和初期に高揚期を迎えた有力な大衆メディアとしての役割を解明することが重要である。とりわけ、明治以来の大道芸の系譜に連なるであろう紙芝居が演じられた「場所性」の問題、および子供の暮らしの重要な一コマを形成したであろう紙芝居実演者による「手渡しのメディアの直接性あるいは原型性」がもった機能に着目する必要がある。またやがて大人向けの常会で演じられるようになる国策紙芝居への「子供という存在の関わり」の実態、さらには実演者の徴兵・工場動員、子供の疎開などによる「戦時下の生活場面の変化」を、国策紙芝居の前史となる昭和初期の街頭紙芝居時代・日本教育紙芝居協会成立とともに言論検閲下に入る国策紙芝居時代・太平洋戦争開始以降という歴史的な文脈をも絡ませながら捉えていく必要がある。
- (2) 紙芝居の作家性：紙芝居は描くことと見ることの相関において成立する。櫻本先生が指摘された表現責任の問題、紙芝居作家の「内的必然性」を分析することがもう一つの重要な研究課題となる。作者の制作動機は、作品の良し・悪し、好・不評を生み出す基本にあるだけでなく、各時代の細部の像を復元し、時代の複雑さを複雑さとして捉えるためにも、作品制作への関与動機あるいは作者の内在的問題を軸にして考察する作業は欠かせない。先ほど実演された「チョコレートと兵隊」は昭和13年に映画化され、UCLAにフィルムが保管されていたが、2004年9月に国立近代美術館フィルムセンターの高峰秀子展で上映された。平野共余子氏によれば、「日本映画 ある心理作戦」というアメリカの日本研究プロジェクトに携わったR. ベネディクトはこの作品を「反戦映画」と捉え、F. キャプらは「戦争を支えるものの手強さ」をその中に読み取ったという。実は映画のラストシーンには、長男が「チョコレートなんか要らない」「自分は父親の仇を討つ」と決意する場面が描かれているが、紙芝居作品は1936年版・1941年版ともに「仇を討つ」ラストになっていない。これをどう読むかは、1941年版の脚本家・

國分一太郎の作家性にかかわる問題であり、他の作品を含めて多様なファクターを如何に読み解いていくかという課題として捉える必要がある。

- (3) 植民地紙芝居：国策紙芝居のなかに、満州や南方の戦線で演じられることを目的として作られた「植民地紙芝居」あるいは「宣撫紙芝居」があり、その中に女性画を描いた小野佐世男、漫画家の横山隆一などが関与した作品もあると考えられる。紙芝居と植民地という文脈で、この実態解明も重要である。
- (4) メディア研究へのスタンス：多様な広がりをもつメディア研究は近年多くの実績を上げており、広い意味での表象文化論というアプローチで紙芝居を読み解く方法もある。しかし、時代の実態を細部にわたって解明するためには、メディア研究の方法論を潜って、もう一度現代史の現場に問題を戻すという方法を取り入れるべきであると考えている。

中島 安田先生から、本センターの研究への取り組みについて、作家性の問題・作品の読みの問題など、重要かつ基本的な構えが提起された。つづいて、富澤先生のご発言をお願いします。

富澤 お手元のレジュメをご参照ください。実証中心の日本の歴史学のなかで私が取り組んできた文化史・民俗学の研究歴と、本センターの紙芝居閲覧をとおして、大衆メディアおよび国策紙芝居について感じたことをお話しします。

- (1) 現在“クールジャパン”として称揚されている日本のサブカルチャー（映画、アニメ、漫画など）は、すべて戦争協力をとおして形成されたものである。戦後公職追放を受けた円谷英二「ハワイ・マレー沖海戦」（1942年）は最高水準の特撮映画であり、初の長編漫画映画「桃太郎の海鷲」（1943年）そして「桃太郎海の神兵」（1944年）は海軍省後援で新兵教育のためにつくられた。漫画家には公職追放者はないが、さきほどの実演作品の画家である近藤日出造の戦時下の活動は、石子順造また櫻本先生の「戦争とマンガ」において批判されているとおりである。
- (2) 戦争紙芝居への雑感として、街頭紙芝居と違い大量生産されたことによる観衆の多さ、また大人向けの作品も多いということ。人物諷刺画よりも絵物語風の密度の濃い人物と背景が一体となった描写作品にアピール性があること。街頭紙芝居のような連続ものではなく20枚前後で一作ごとに完結する脚本のほうが訴求力が高く、そこに国策紙芝居の高いメッセージ性が認

められることなどを指摘したい。

(3) 作品の傾向としては、露骨な戦意高揚・敵愾心を煽る作品よりも、銃後・町・農村共同体の維持・団結を描き、「家族愛」「同僚愛」「属する組織内での誠実さ」を訴える作品に、訴求力のある作品が多い。

(4) 最後に研究のテクニカルな問題として、デジタル発信による紙芝居資料へのアクセス環境を整える必要があるが、その一方で、研究としては原資料に即することが必要であることにも留意したい。

中島 これまで安田・富澤両先生から、研究上の課題についてお話があったが、次は会場から、特に若い方々からの発言を求めたい。

会場 院生です。さきほど「紙芝居は半径3メートルの宇宙」という紹介があったように、紙芝居が演じられた現場感が、デジタルアーカイブでは希薄になるのではないかと。研究資料として取り組む際に、当時の聴衆との距離感が分からないのではないかと感じた。また、「チョコレートと兵隊」を当時、誰が、どのように見ていたかを知りたいと思った。

会場 同じく院生です。転向の問題が上げられたが、転向しなかった人の作品があれば見てみたい。

会場 昭和17年生まれの漫画家です。作品を見て感動したらどうしようと思っていたが、感動しなかった。それは作家の想いが無いから、安田先生の言う「内在性」が無いからだろう。実演者は良かったが、作品は良くない。絵にも傑作はない。元々、民衆も戦争をそんなに甘いものとは思っていなかっただろう。日本人はもっと利口だったと思う。現在の政治漫画は墮落しているが、希望として、国策紙芝居VS反戦紙芝居の場をつくってほしい。その際は私を呼んでください。

中島 実演作品以外に、櫻本先生の著書で紹介されている「七つの石」「軍神の母」などがある。やはり核心は、貧しい母ものに琴線に触れるものがあるということだろう。

会場 母ものに感動する日本人的な感性を克服しなければ

ならないと思う。

事務局 これまでの討論で、研究上の課題として、デジタル化による紙芝居資料へのアクセスに伴う問題や、作品分析の問題などが取り上げられた。作品分析については、安田先生の基本的なご指摘とともに、さらには個々の作品ごとに、時代・場所・登場人物・脚本のキーワード・そこから導かれるメッセージなどをデータベース化していくというアプローチがあるかと思われる。この点同じような研究に先行して取り組まれている静岡県立大学の森山先生が会場にお見えになっておられるので、お話をお伺いしたいと思います。

森山 私達の研究は、静岡県掛川市の篤農家に、戦時下に入手した初期の疎開児童を聴衆として演じられていた紙芝居190点余が所蔵されており、これを調査することから始まった。これをどう位置付けるかという観点から出版点数を調べた結果、刊行作品は約1000点くらいと把握している。私達が調査した紙芝居目録と貴センター所蔵作品との重複をOPACで調べたところ約100点くらいが見えず、その意味でユニークなコレクションと言うことができる。紙芝居の分析という点については、街頭紙芝居の分析手法が国策紙芝居に通用するか、有効であるか疑問であり、いったん切り分ける必要があると考えている。むしろ、常会や工場などで演じることを前提に大人向けに作られたものが主である国策紙芝居の出版の意義性というか、政府をバックに紙の統制も受けずに販売の労苦もなく作られた、幻の雑誌『紙芝居』でも粗製濫造が当時から指摘されていたという点を踏まえる必要がある。さらに、国策的な意図が明確でない作品が半数を占めるという紹介があったが、そのような子供向け作品にどのような視線を向けるか、たとえば戦前戦後ともまったくブレていない農村ものの代表者・川崎大治をどう評価するかは重要な点ではないかと思う。

中島 ありがとうございます。研究課題だけではなく、ご自分の体験談などを含めて一般の方からのご意見も

伺いたいと思います。

会場 井上ひさし氏の東京裁判の三部作「夢の裂け目」を読み、戦時下に子供が紙芝居をどう受け止めたかに興味をもった。戦後も紙芝居文化が広がりを保ち、今回新聞で催しがあることが分かり、参加してみたいと櫻本先生が沢山の本を書かれていることを知った。今後のお願いになるが、貴センターの研究の成果を一般市民にも知らせていただけるようにしてほしい。

会場 私は昭和9年、茨城の水戸の生まれだが、国策紙芝居を見たことがない。学校でも街中でも見たことがない。工場などで演じられていたのだろうが、そうしたものが、戦時下に大衆メディアとして成立していたと言えるのか、誰を目的に作られ、誰が見ていたのかを解明する必要がある。

会場 さきほど女性の涙の問題があったが、それが国策紙芝居の目的のひとつであったのではないかと。女性はこうあるべきだという決めつけが今に引き継がれているのではないかと。銃後に残された女性向けの町内会での上演目的はそこにあったと言えるのではないかと。

会場 櫻本先生の旧所蔵500点中、神奈川大学に入らなかった残りはどこへ行ったのだろうか。

中島 ご意見ありがとうございます。それでは、最後に登壇者の先生方から、補足的なご発言があればお願いします。

櫻本 私が紙芝居研究でできなかったことがある。「レコード紙芝居」というものがあるが、この全体が把握できていないこと。「駄菓子屋紙芝居」たとえば「ダムダムダン吉」など4点がコレクション中にあるが、このような紙芝居が他にいくつあるか未調査であること。今回復刻され幻ではなくなった雑誌『紙芝居』の全貌やそこに掲載されていた新作の合評会の記事などが未検討であること。吉屋信子氏が昭和17年2月に女流の会というところで行ったと言う紙芝居実演、壺井栄が従兄に紙芝居の舞台とセットを贈ったという記事があるが未確認であること、などである。

安田 さきほどお話できなかったことを2点補足する。文化人・知識人の転向問題は思想があることが前提の議論であり、技術・技能を支えにしてきた人々の転向の扱いは従来の研究では空白である。もうひとつ、戦後の街頭紙芝居がつぶれていくプロセスの中間に貸本文化への流れがあり、これは国策紙芝居と決定的に違う紙芝居文化がもつ或る種の“いかがわしさ”の行方というかなり大きな問題につながる。

富澤 デジタルアーカイブでは紙芝居の魅力が減るのではという意見があったが、常会などで演じられたことを考えるとある歴史の中でだけ成立したメディアなのだろうと思う。また母もの作品の涙の問題ですが、女性の社会進出が戦時下に進んだということとあわせ、フェミニズム研究からの分析も求められると考える。

中島 ありがとうございます。以上で公開研究会を終わります。今後のセンターの研究に対する要望も出されましたが、センター長のもとで取り組んで行かれることを期待したいと思います。

(文責：非文字資料研究センター事務局 原田広)



写真15 公開座談会の様子



写真16 会場の様子②



写真17 会場内のパネル展示



写真12 中島三千男氏



写真13 安田常雄氏



写真14 富澤達三氏



＊ 研究会報告 ＊

『東アジアの租界とメディア空間』研究会

東アジアの租界とメディア空間

日時：2013年1月11日、5月24日、7月25日

場所：神奈川大学横浜キャンパス 21号館4階405会議室

大里 浩秋 (非文字資料研究センター 研究員)

孫 安石 (非文字資料研究センター 研究員)

租界とメディア班が開いた研究会についての報告をし
ばらく怠っていたので、スペースをもらってここに3回
分をまとめて行いたい。

1 2012年度最後の研究会を、2013年1月11日(金)
に開き、孫安石氏と菊池敏夫氏に報告していただいた。

○ 孫報告「上海の越界築路問題についてのメモ」は、
戦前の日本の租界研究における代表作と目される植田捷
雄『支那に於ける租界の研究』をもとに租界の設定とそ
の地域的拡張の経過を押さえた上で、租界工部局と中国
側との交渉で「租界内全住民の健康、娯楽及び運動の為
め公用に供」する(1866年の「土地章程」として設け
た「越界築路」がたどったその後の経緯を、1932年の
フィードム報告や日本の陸軍省の資料「滬西越界路警察
権に関する暫定取極の件」(昭和15年「陸支密大日記第
9号2-4所取」)などを使って紹介した。

○ 菊池報告「上海租界と百貨店研究について」は、ま
ず租界都市上海に百貨店が生まれる歴史的条件として、
共同租界に「華洋雜居」型の資本主義が形成される過程
をたどり、その間に中国人と外国人間、中国人相互、外
国人相互で活発な不動産取引が展開されたことに注目す
る必要があり、中国と諸外国との不平等条約という角度
のみでの租界研究は再検討を要すると述べた。さらに、
南京路を中心に開発が進んだことと大衆的都市文化が開
花したことに関連して、「華洋雜居」の共同租界は中国人
社会でもある。この中国人社会は西洋文明などイン
ターナショナルな要素を受容し、江南のトラディショナ
ルな文化や中国のローカルな文化を継承し、彼らの都市
生活のニーズに適應させ、新しい都市文化(上海化した
モダン上海という大衆文化)へと昇華した。」と大変に

興味深い指摘をされた。

なお、菊池氏は長年本学付属高校で教鞭をとられて最
近退職されたばかりであり、『民国期上海の百貨店と都
市文化』(研文出版、2012年、中国語訳では『近代上海
的百貨公司与都市文化』、上海人民出版社)を始め、上
海租界に関する多くの論文を発表されている。(大里浩秋)

2 2013年度第1回研究会は、5月24日(金)に開き、
孫安石と村井寛志氏が報告した。

○ 孫報告は、韓国・国民大学中国人文社会研究所で開
催されたシンポジウム「現代中国知識網絡の動力」に参
加して、そこで話題になったことを紹介するものであ
った(詳細は割愛)。

○ 村井報告は「民国期上海メディアの香港における
“転生”一戦中、戦後の『良友』画報から」のタイト
ルで行った。村井氏はすでに論考「上海大衆文化と香港・
華僑資本『良友』画報の事例から」(『アジア遊学』第
103号『良友』画報とその時代、2007年)の中で、
1990年代に「老上海」に対するレトロ趣味的な見直し
が進む中で、上海の大衆文化が香港を介した広東系華僑
ネットワークの資本、市場とも密接な関わりをもってい
たことを明らかにしているが、今回の報告では、1930
年代の上海事変と1945年以降、とくに1954年以降、
香港で発行された『良友』画報の概略を紹介するもので
あった(以下、香港版『良友』と略称)。

それによれば、上海の『良友』の創業者・伍聯徳名義
で発行された香港版『良友』は1954年から1968年ま
で発行されたが、その経営面における連続性を考えると
きに、上海時代の『良友』のスタッフとの関与は薄く、
政治的な傾向としては国民党依りの記事が目立つ、とい

う。香港版『良友』の内容は、①香港を中心とした流行
と風俗を紹介するもの、②香港と東南アジア、そして太
平洋地域を含んだエキゾチックな民俗文化を紹介するこ
とに多くの紙面を割いており、例えば、イギリス領のサ
ラワク州(沙撈越、Sarawak)先住民やギルバート諸島(吉
露抜群島、Gilbert Islands)、台湾の先住民、チベット、
インド、東南アジアなど幅広い範囲に及んでいた、とい
う。しかし、その記事は写真を中心としたもので、文筆
家としての有名作家の寄稿はあまり見られない点も紹介
された。また、興味深かったことは、1954年11月に発
行された香港版『良友』の第3期には世界各地における
雑誌の販売所(ネットワーク)が掲載されているが、そ
の分布はアメリカ、カナダ、フランスの他に、キューバ、
ベネズエラ、インド、マレーシアなどに広がっていた、
という点である。これは華僑を讀者にしたいという香港
版『良友』の狙いを窺わせるものとしても興味深い。報
告の最後では香港版『良友』の他に、1971年には快活
出版社を版元とする『良友』が発行され、1984年には
創立者の伍聯徳の子である伍福強による復刊が再度試み
られ、1998年の停刊まで174期が刊行されたことなど
も紹介された。(孫安石)

3 2013年度第2回研究会は、7月25日(木)に橋本
雄一氏(東京外国語大学)、木之内誠氏(首都大学東京)
を招いて開催した。

○ 最初に、孫安石氏が「上海の日本語新聞『上海新報』
がみた中国(Ⅰ)」のタイトルで報告した(内容の紹介は、
2013年度年報『非文字資料研究』に掲載予定なので割
愛する)。

○ 橋本報告「大連の中国語新聞『泰東日報』と植民地
都市のトボスー第一次大戦後、五四期という時間と空間
一」は、1908年に大連で創刊された中国語新聞『泰東
日報』の1919～20年に発表された傅立魚(ペンネー
ム西河)の複数の文章を取り上げることで、彼が中華民

国「国民」として、大連を支配し植民地化した日本人に
さまざまな物申し、例えば、日本は中国を支那と呼ぶの
を改めるべきとか、満鉄は中国人乗客への差別待遇をや
めるべきとか主張し、また、住民の土地や家屋、教育、
医療、あるいは治安に関して日本側の保護を要求したこ
とを紹介した後、傅の文を読んで気づいたこととして、
「総体的なかつ多様な意味での帝国植民地を経営する側
の人間(ロシア人、特に日本人)は「都市計画」として
の大連<政治>や後代の大連<記憶>に従事した。戦後
日本人の<記憶>は往々にして、・・・整序と排除を事
とした帝国日本の大連「都市計画」に、まさに似ていな
いだろうか(清岡卓行『アカシアの大連』を始め)。」と
述べた。抽象的な表現で、大里には理解できないところ
もあったが、それに続けて「そのような<政治>と<記
憶>に読まれなかった+見えない中国語新聞による歴史
と空間についての語り、を、なんとか地図作成のなかに生
かすことが必要となると思われる」と述べるのは、現在
共同研究で下記木之内氏らと大連の歴史地図の作成を準
備している橋本氏の志を示すものとして、理解できそう
な気がした。

○ 木之内報告「大連の歴史地図の作成について」は、
橋本氏他数名と科研費基盤Cを得て「旧満洲地域の都市
歴史文化地図シリーズ第一分冊「大連、旅順編」の制作」
に取り組んでいる中間報告として、作成途中の大連市内
の歴史地図を示し、かつ取材した大連市内の現状を画面
で紹介しながら、作成の苦心や取材中のエピソードを話
された。木之内氏は先に『上海歴史ガイドマップ』を
公刊して好評を博しており(初版は1999年、増補改訂
版は2011年、大修館)、その際の経験は大連の歴史地
図を作成する際にも生かされるに違いない。まして、大
連と旅順は、日本が日露戦争に勝利してロシアから奪い
取った租借地であり、1945年の敗戦まで我が物顔で占
領した土地であるから、その占領ぶりが地図上に反映さ
れるに違いないのである。(大里浩秋)



1月11日研究会の様子



5月24日研究会の様子



7月25日研究会の様子

＊ 研究会報告 ＊

『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』研究会

中島三千男著『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』をめぐって

日時：2013年7月13日（土）15：30～
場所：神奈川大学横浜キャンパス 1号館 301会議室

橋川 俊忠（非文字資料研究センター 元研究員）

はじめに

今回の研究会は、海外神社跡地研究のパイオニアとして20年にわたって研究をリードしてきた中島三千男研究員が上梓した『海外神社跡地の景観変容—さまざまな現在』（神奈川大学評論ブックレット37、御茶の水書房）の検討を中心として、海外神社跡地研究の到達地点を確認し、今後の方向性を見定めることを目的として開催した。研究会では、橋川が中島（以下、肩書き、敬称略）の著書に即して論点提起を行い、その後、約20名の参加者全員で3時間近くにわたって討論を行った。紙幅の関係上、詳細な報告はできないので、以下主な論点に絞って議論の内容だけを紹介することにした。

海外神社の定義と分類基準について

そもそも神社をどう定義するかということ自体が難しい問題だが、研究会では、「海外神社跡地」を研究するという課題に必要な範囲で神社の定義を考えることにした。中島によれば、「近代日本において、日本人の海外進出や移民の増大、大日本帝国の『勢力圏』の拡大に伴って、アジアを中心に広く世界（海外）に」建てられた1600余社を海外神社と呼び、「日本の敗戦、『帝国』の崩壊により機能を停止した海外神社の跡地」を調査・研究の対象とするという。さらに、中島は、そうした海外神社を、居留民自身のために建てた「居留民設置（奉斎）神社」と、総督府・軍など、現地人の教化のために建てられた「政府（奉斎）神社」に大別できるとした。しかし、そうした設置主体を基準とした分類では、取りきれない神社があるのではないか、ということが指摘された。たとえば、満州国建国忠霊廟、建国神廟の場合である。前者は日本の靖国神社に擬せられた施設には

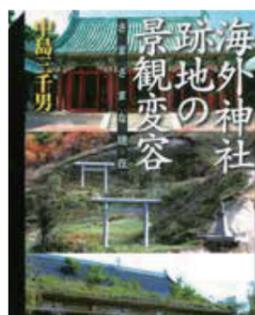
違いないとしても、建築様式は、伽藍の配置は中国の廟に近く、本殿は満州風であり、全体として五族協和を掲げた満州国の「理念」を表現するものになっているように見える。また、後者は、建築様式も、祭神も純日本式であるが、満州国皇帝の宮殿深くに建てられ、直接的に現地人教化を目的としていたとは思われない。これは、傀儡とはいえ、建前上は独立国家として「建国」された満州国の特殊性によると考えられるが、定義・分類の上では問題が残る。

さらに、徐州神社は、現地での聞き取りによれば、中国人の立ち入りは厳しく禁止されていたとのことであり、これも中島の定義にはそぐわない。軍営内に設置された「営内神社」は軍人専用であり、一般の参拝は制限されていたことが指摘されたが、徐州神社が「営内神社」であったかどうかは、今のところ確認できていない。

いずれにしても、海外神社の定義と分類は、設置主体、



写真1 建国忠霊廟本殿



目的、機能など様々な角度から再検討されるべきであることが確認された。

景観変容の要因をめぐって

中島は、跡地の景観変容を「改変」「放置」「再建」「復活」の4つに類型化（類型の内容については中島前掲書を参照いただきたい）し、その変容の要因として、未だ仮説の段階にあると断りつつ、5つの要因を挙げている。「政治的要因」「社会の変容」「経済発展の度合い」「文化伝統」「支配交替の<刻印>」の5つである（この内容についても、中島前掲書の参照を願わざるをえない）。サハリンから、中国大陸、朝鮮半島、台湾、東南アジア、南洋諸島に至るまで、105か所の跡地を実地に調査した経験に基づく類型化と要因分析は、十分に説得力がある。

それは認めた上で、研究会では、跡地の存在する地域の特性（植民地、占領地、入植地など）を考慮し、各地域での多様性の検討を踏まえて全体を検討する必要はないか、立地それ自体が変容を規定する要因になっていないか、「伝統文化」要因の中で、跡地地域の宗教意識の在り方は特に考慮する必要があるのではないか、などの意見が出された。

さらに、「復活」の事例として挙げられている開山神社について、これは特殊事例として扱うべきではないかという見方が提起された。開山神社は、元は開山廟、後に明延平郡王祠と号し、明の遺臣鄭成功を祀っていた。日本統治開始の翌1896年、開山神社と改称された。改称後も鄭成功は祀られ、社殿も逐次、鳥居、日本式の拝殿など付加されたにとどまり、基本的建築には変更は無かったことは中島が指摘している通りである。だとすれば、元あった堂舎を破壊し、祭神もすげ替えて日本式の神社を建てたのとは相当に異なる在り方と言わざるをえない。これは、日本、台湾、大陸にかかわる歴史上の人物である鄭成功の政治的利用という特殊な問題によるものであり、その特殊性を一般的な類型の中で扱うことは、かえって特殊性の意味を失わせる結果となるのではないかと、という批判であった。批判の当否はさておき、開山神社には、今後重点的に研究を深めるべき多くの問題があることを確認した。

研究の意義に関して

中島は、前掲書の「おわりに」において研究の意義について「海外神社跡地の研究が、過去（戦前）の事実を

知る、あるいはその残映を見るということに止まらず、何よりも、その国、その地域の『現在』を知る、『現在』を見ることになる」と述べている。跡地を調べるといふ、ともすれば懐古趣味に陥りかねない、あるいはそのように見られかねない研究について、「現在」を知る、「現在」を見るという中島の提言は、けだし至言である。

しかし、筆者にはもう一つ気にかかったことがあった。それは、研究会に参加した神社関係者の「戦後、神社関係者は、海外神社の問題に無関心であった。あるいは無関心を装ってきた」という発言である。分かっているだけで1600以上もの神社を海外に建てたにもかかわらず、その行く末に関心を払わず、払おうともしてこなかったのは、日頃初詣だ、七五三だと神社と身近に関係を持ってきた大部分の日本人も同じではないか。だとすれば、海外神社跡地の問題は、日本人にとって神社とは何かという問題につながる。その意味で、海外神社跡地の研究は、海外神社が建てられた国や地域の「現在」を知ることにとどまらず、日本の神社・神道の「現在」を知るため重要な意味を持つ。もっと広く言えば、海外に神社を建てたこと、そしてそれを放置してきたことを考えることは、多くの日本人が、伝統の名において神社を「日本的」として受け入れてきたこと、そのこと自体の意味を問うことになるのではないかと。問題は、そのように避けようもなく回帰してくるのであろう。

この点について、研究会での議論は十分であったとはいえないが、重要な問題なので一言付言しておく。

おわりに

研究会のテーマは、先に述べたように中島の著作の検討であった。そして、この著作は、中島が、学部長・理事・学長という激務を伴う要職を歴任しつつ執筆されたものであった。その点、ただただ頭が下がる思いである。研究会参加者一同、その意味での敬意を払いながらも、研究内容については忌憚なく意見を交換した。これは、研究会が、開かれた研究会として継続されてきたことの賜物であろう。研究を支えてきた諸氏の労を多としたい。なお、中島は、今春すべての要職を離れ、研究に専念できることになった。今後の研究の発展を期待しつつ稿を閉じる。

研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容

新郷・徐州・南京神社跡地現地調査報告

橋川 俊忠
(非文字資料研究センター 元研究員)

はじめに

今回の調査は、日中戦争において日本軍が占領した地域に建てられた神社跡地の調査を目的に実施した。調査団は、当センター研究員津田良樹を責任者とし、この研究の協力者である橋川俊忠及び中国現地から上海海洋大学教授韓興勇氏の参加を得た。韓教授には、調査の鉄道切符・宿の手配から案内、通訳までお世話をいただき、深く感謝申し上げる所である。なお、調査を実施した3月は、日中関係が依然として緊張している時でもあり、韓教授のご協力は、調査の円滑な実施のため実に心強かったことを記しておきたい。

3月20日成田出発、上海にて韓教授と合流、同日中に河南省鄭州着。翌日、新郷に入り、調査。その後、開封・曲阜を回り、23日徐州着。翌日は終日徐州調査、夕刻南京着。25日は、津田研究員旧知の南京大学建築学科教授李百浩氏の案内によって南京神社跡地調査。26日上海発、同日夕刻成田着。以上の日程で調査を実施した。

この間、周知の大気汚染を実感するなど厳しい面もあったが、新幹線網の発達など、現代中国の著しい変化を目にし、跡地の消滅、それについての記憶の喪失など、今後の調査の困難さに思いをはせざるを得なかった。

新郷にて

新郷は、河南省の北部に位置し、郊外には新幹線の駅も建設され、近年工業化の進展目覚ましい省の中核都市の一つで、それだけ市街の変貌も著しく、神社跡地の確認は難しいことが予想されたが、実際、中心街は新しい商業施設が建ち並び、古い建物はほとんど見られない状況であった。何人かの年寄りにも尋ねてみたが、まったく神社跡地についての情報は得られなかった。



写真1 新郷神社跡地と思われる集合住宅

青焼きの「新郷新市街都市計画図」(新郷神社造営敷地位置が斜線で示してある戦前の地図)と最新の「新郷市城区図」を比較し、跡地の同定を試みたが、前者が簡略な計画図であること、後者は記載の地名が古い地名を残していないこと(手掛りになる街路名は、人民路、解放路、勝利路、和平路など、人民共和国誕生後各地に多く見られる名称になっていた)など、景観が一変してしまっていることとあいまって、それは極めて困難であった。そこで、おおよその場所の見当をつけ、神社敷地の長方形の地籍が残っていないかどうか歩いて調べることにした。数時間を費やし、検分した結果、南北を現在の平原路・人民中路、東西を解放大道・勝利北街に囲まれた地区で、その地区を東西に二分する東方步行街(新しい商店街の遊歩道)の南側の地籍が最も該当しそうなことが分かった。その地籍の東西・南北を津田研究員が歩測したところ、敷地図記載の距離とほぼ一致することを確認した。

そこは、大部分が、空軍用の住宅団地になっているとのことであった。神社跡地が、公園などの公共施設やなんらかの公的用地としてまとも利用されている事例が多いことも考え合わせると、そこが神社跡地であった可能性は高いと思われるが、鳥居や灯籠などの遺物も全く見当たらず、それ以上確認するすべが無かった。

中国人は入れなかった徐州神社

徐州では、神社跡地の同定は比較的簡単であった。ここも市街の様相は大きく変わっていたが、昭和16(1941)年満州日日新聞社発行の比較的詳細な地図があったこと、大きな川があり、平坦な新郷とは異なり比較的起伏のある地形であったことが、跡地の同定作業を容易にしてくれたのである。しかし、跡地の位置はほぼ同定できたものの、そこには現在大きな煙草工場が建っており、敷地の中に入ることは難しく、周囲に遺物も見つからないため、詳細は分からなかった。

その煙草工場の周囲の道路をうろろろしている時、買い物帰りらしい老人が、道端で携帯用の椅子に腰かけ、一息入れているのを見かけたので、話を聞いてみることにした。老人は、後で聞いたところでは、工場の近所に住み、李化光さんといひ、当年89歳になるという。神社があった当時二十歳前後の年齢で、そのころから同所に居住していたという。約70年も前のことになるが、記憶は確かで、いろいろ教えていただくことができた。

李さんの話では、神社敷地は煙草工場が建設された時に整地され平らになってしまったが、社殿のあったあたりは一段と高くなっており、植栽もあったという。また、



写真2 聞き取り調査をする韓教授と津田研究員



写真3 徐州神社跡地の煙草工場

道路も付け替えられ、現在の工場と道路の境と神社の敷地境とは一致していないが、敷地は玉垣で囲まれ、入口には鳥居があり、その横の建物に番人が常駐し、中国人は中に入る禁じられていた。そのため、外部から見える範囲しか分からず、中の様子は知らないとのことであった。また、神社は、戦後まもなくの1946年頃、国民党時代に取り壊され、跡形も無くなったという。

徐州は、中国古代よりたびたび大きな会戦が行われた軍事的要衝で、日中戦争時も激しい戦闘が繰り広げられ、国共内戦においても戦場となった(実際、徐州博物館は、さながら戦史博物館であった)。そういう地に、中国人に入ることを禁じた神社を建てたのはどういう意味があったのか。おそらく、日中戦争以来、徐州での攻防を見続けてきたであろう李さんには、神社についての質問には、穏やかに淡々と答えていただいたが、李さん自身のその時代の経験については聞くことができなかった。神社跡地の研究は、第一に「跡地」という「物」についての研究ではあるが、神社があったことがその地の人々の心の中に何を残し、何を残さなかったのかを問うことでもあるのではなからうか、ゆっくりと遠ざかる李さんの後姿を見ながら、調査の目的や方法を問い直さざるを得ない思いにかられた。

残されていた南京神社

南京神社の遺構が残っていることは、すでに中島三千男研究員からの情報で承知していたが、実際にこの目で見てみると、その残り方に驚かざるを得なかった。参道、石段、拝殿、社務所が、当時の姿そのままに残っていた。そして、その内部は改装され、拝殿は設計事務所、社務所は会議室として使われていたが、建物の外形は維持され、江蘇省文物保存単位などに指定されていた(この文



写真4 旧南京神社拝殿



写真5 旧南京神社社務所



写真6 改装された社務所の内部

化財としての保存については、中島三千男著『海外神社跡地の景観変容』神奈川大学評論ブックレット37を参照。

南京神社遺構のある五台山は、日中戦争の南京攻防戦の激戦地であり、日本軍の占領後、日本派遣軍司令官の宿舍も建てられていた（その建物も現存している）。南京は、中国大陸で日本軍が行った暴虐行為を象徴する都市であり、五台山は其中でも日本占領と一番密接につながっている場所である。そのような地に、日本を象徴する神社が建てられ、それが残されていることは、新郷、徐州と跡形もなく神社が消えてしまった所を見てきた目には、まさに驚きであった。

五台山は、南京市中心街から西方の丘陵地帯にあり、もともと風致地区的性格があったらしく、また小高い丘という地形が市街化の波をよけることになったとも思われるが、それも所詮推測の域を出ない。現在は、周囲は江蘇省の五台山体育中心の施設があり、神社遺構はその中にある形になっているが、それらの施設を建設する際にも手を付けられなかったことには、何か事情があると思われるが、今回の調査では調べることができなかった。

なお、今回の調査では新たに二つの発見があった。一つは、地下壕があるらしいこと、もう一つは、「国民政府主席 蔣中正手植」の標柱が残されていることである。

標柱は、拝殿前の参道脇一段高くなった平地の片隅にあり、地下壕はそこから一段下がった現在駐車場になっている草木が生い茂っている壁に鉄製の入口が確認できた。これは、たまたま駐車場に車を止めていた方に教えられたので、中を確認することはできなかったが、間違いは無さそうである。

おわりに

今回の調査は、遺構が残っているにせよ、残っていないにせよ、ともかく神社跡地の現況を確認できたという意味では成果があったと言える。しかし、新たに気付かされた課題も少なくなかった。現地の住民を疎外した神社は何のために建てられたのか、破壊されて当然と思われる遺構が何故残されたのか、神社が建てられた現地の人々の心に何を残したのか、考えてみれば分からないことばかりである。跡地調査から、海外神社総体の研究へ一段と研究の幅を広げ、深度を深めるの必要を感じさせられる調査であった。

また、海外での調査であるからには当然といえば当然かもしれないが、現地での研究者の協力が欠かせないことも痛感した。神社跡地のある現地の研究者とのネットワークの構築などという大それたことは、夢のまた夢かもしれないが、今後追求すべき課題であることは確かであろう。その前に、日本でこのような研究に関心を持つ研究者を育てなければならないことを確認しつつ、つたない報告を閉じたい。



写真7 蔣介石御手植えの記念碑（このあたりの地下に壕があった）

研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容 台湾における海外神社跡地調査

津田 良樹
(非文字資料研究センター 研究員)

はじめに

2013年3月7日～3月11日にかけて台湾において海外神社跡地調査を行った。調査内容は大きく2つに分けられよう。台湾師範大学蔡錦堂先生にご案内をお願いしておいた調査の一日（8日）と研究協力者の金子展也氏と私で動いたその他調査である。

地下神殿を持つ新化社調査を中心とした一日

8日の台南市の調査は台湾師範大学蔡錦堂先生にご案内をお願いしておいたため、充実した一日となった。地元新化鎮の文化財研究グループが調査に参加され、当時、蔡先生のもとに留学中であった本センター大里研究員も同行された。その日一日の行程は、①那拔林神社、②新化社、③奉安殿（新化鎮）、④林百貨店神社、⑤昌南社（専売公社）、⑥第二連隊営内神社（成功大学光復キャンパス）、⑦三崁店社であった。これらのうち『神道史大辞典』付編の神社リストに収録されているものは②新化社と⑦三崁店社のみである。奉安殿が残っているのも珍しいが、その他の神社は軍の営内や企業内神社や一般に公認されていなかった神社であり、通常では発見することが難しい神社も含まれている。

那拔林神社は、町場の小さな神社であったようだ。前方にコンクリート製の階が取り付く、1.2m×1.2mほどの石垣基壇および、基壇中央付近に本殿の亀腹と思われる石が残る。しかし、その上には後世の神社とは無関係な石碑が建っている。本殿は残っていないが、かつての様相を想像することが充分可能な遺構である。

新化社跡は虎頭埤風景区（公園）となっている。公園と住宅地との境界には大きな鳥居や神橋が今も残っており、10年ほど前に湖の底から見つかったといわれる「新化社」と石に刻まれた社号碑も立てられている。石段な



写真1 新化社の社務所地下に造られた地下神殿崖面からの入口



写真2 新化社地下神殿の内部。正面の階段は元の社務所につながる。一方、左側は崖に口を開いた開口部である。壁・天井を仕上げていた漆喰はほとんど剥落しているが、壁・天井境の入隅を回線代わりに装飾的に塗り廻したコブなどに一部漆喰が残っている。

どは残るが、主要部の社殿は残っていない。それでも、元の参集殿だと思われる建物が今も売店として使われている。特筆される点は元社務所の地下にあたる位置に地下施設が設けられている点である。地下施設は階段で地下に至るルートのほか、崖地に造られており、その崖面にも出入口が設けられている。内部は、かつては天井や壁面を漆喰で塗り廻すなどの仕上げがされていたようだ。この地下施設は御神体を避難させる防空壕ないしは地下神殿と思われる。このような地下施設は台湾神宮にも造られていることが判明している。また、旧満洲国皇帝の帝宮内にあった建国神廟や中国本土の南京神社などでも確認しており、太平洋戦争の末期に造られた神社に



写真3 林百貨店屋上の林百貨店神社は百貨店建物とともに修復され保存・公開されるという。

多いようだ。何の目的で造られたのか、現時点では特定できないが、いずれにせよ興味深い施設ではある。

林百貨店神社は林百貨店の屋上に造られた企業内神社である。日本統治時代の台南に造られた林百貨店は梅沢捨次郎の設計で、台南唯一の近代的エレベータを備えた5階建ての鉄筋コンクリートの建物であった。そのビルが復元修理され、屋上にあった神社部分も本殿はないが、石灯籠や笠木などが取り去られた状態の鳥居なども修理され、一般公開されることになったようだ。日本統治時代に日本の資本で造られた百貨店ビルおよび神社を修理し、公開するという台湾人の精神構造も興味深い。

三峯店社は台湾製糖株式会社三峯店製糖所によって昭和6年に造られた企業内神社である。かつての工場の様子を示すものは現在ほとんど見られないが、神社遺構は比較的よく残っている。一段高くした基壇の周囲に人造石の玉垣をめぐらし、さらに本殿の建てられていた基壇が高く築かれている。本殿基壇上には井桁に組んだ本殿の土台が載ったであろうコンクリート製の基礎やそれから突き出したアンカー用鉄筋が残る。また社殿に向かう参道の両脇には石灯籠の下部が並び、手水鉢や狛犬の台ではないかと思われる部位も残る。

台湾各地の神社跡を巡った三日間

翌3月9日は台南から高雄を経て旗山で旗山神社を、次いで岡山で岡山神社、さらに仁福稲荷社を調査した。

旗山の中心街路中山路と直行する華中街を西に突き当たった丘上に旗山神社は建っていた。華中街の北側には旗山国民学校、突き当たり南側には武徳館が配されていた。武徳館は改装されているが、旗山区の文化財として修復保存されている。また、旗山国小にも中山堂(旧礼堂)、旧校舎が文化財として保存されている。古写真によると



写真4 仁福稲荷社の戦後増築された覆屋内に、木造の一間社流造本殿が今も残る。

武徳館の山側に大きな鳥居があったことがわかる。現在、鳥居はなく、上段、下段の石段があるが、上段の石段は神社時代のものであろう。上段の石段の両側に石灯籠が並んでいるが、これらは近年に復元して置かれたものである。本殿前にも石段があったのではないかと思われるが、新設道路ができており不明である。当然社殿などはなくなり、付近は孔子廟を中心とした旗山中山公園となっている。

岡山神社は岡山中山公園内に建っていたようだ。公園は現在工事中であり、その入口附近に笠木・鳥居を取り去り両柱と貫だけとなり、赤く塗られた大きな鳥居が建っている。社殿がどのあたりにあったのかは不明であるが、公園のなかに岡山寿天宮が建てられており、その建物内にはなぜか神社のものではないかと思われる神輿が飾られている。また建物の周囲には神社時代の石灯籠の部材と思われる石材が無造作に積まれている。

仁福稲荷社は高雄市仁武区横山二巷に残っている。小さな神社であるが、石段ばかりでなく木造の一間社流造の本殿が残っている。本殿の前半分から向拝前までを台湾風の覆屋が後世に増築されており、一見日本風の流造本殿が存在するようには見えない。しかし、詳細に見て行くと向拝柱と本殿を繋ぐ海老虹梁があり、その先端部の木鼻には渦の絵様が彫られるなど極めて日本的意匠である。また、台湾風の覆屋の正面側に接するように鳥居が建っている。台湾風に真っ赤に塗られているが、稲荷だとすれば当初から赤く塗られていたのかもしれない。小規模で改造されているとはいえ本殿・鳥居が残っている点では貴重な遺構といえよう。

3月10日は台中を出発し、彰化、清水、苗栗とまわった。彰化神社は私にとっては2度目の訪問である。荒廃しているものの社務所が残っており、その再確認が目的であった。

縦貫鉄路の海線沿いに位置する清水神社は、台中市清水区の現在の清水公園牛罵頭遺跡文化園区に昭和12年に造られた。神社跡地へは前面道路から神社時代の雰囲気を残す288段にわたる長大な石段を登り、さらに左に矩折に曲がるとかつての境内地が広がっている。戦後、境内地は台湾陸軍砲兵隊の清水駐屯地となったが、1997年には軍も撤退した。そのため牛罵頭遺跡文化園区は神社遺跡に軍事遺跡が重なった状況になっている。軍時代に指令台が造られており、その両側に神社時代の石段と狛犬が残る。周囲を囲む玉垣が残るほか、石灯籠の残骸が積み上げられた状態が見られるが、社殿などの面影はない。むしろ兵舎が立ち並ぶ軍駐屯地の様相を示しているといえよう。それでも狛犬台座に「奉納 祝皇紀二千六百年 大甲郡小公学校職員一同」の刻銘があるなど神社時代の痕跡は随所に残っている。

苗栗神社は苗栗市福星里福星山の現在の猫狸山公園の地に昭和13年に造られた。今では羅福星忠烈祠に転用されている。上中下段の石段、さらに本殿前の石段と4段構えの石段があり、本殿前石段を登った奥に東面して本殿が建っていたと思われる。中段の石段を登った両脇に鳥居の痕跡があり、本殿前石垣下に石灯籠の台座らしき石材も残る。そのほか参道の南側一段下がった場所に神社との関係は必ずしも明らかではないが、日本家屋を改造したらしき建物が南面して建っている。

苗栗稲荷神社跡地は苗栗市公所と国立総合大学とによって共同管理されているようだ。苗栗市二坪山砲澤紀念公園内にあり、元の本殿跡附近には日本の一般の神社について解説したガラス板製の説明板が設置されるなど跡地として保護されているようだ。とはいえ当然ながら社殿などは残っていない。3段に分かれた石段が残り、下段の石段前には笠木が取りはずされた鳥居が残るほか、中段の石段が始まる両脇には火袋から上は欠損しているもののコンクリート製灯籠も残っている。灯籠には昭和部分が欠き取られ、「十三年十月」部分だけが残る刻銘も見られる。さらに中段上には鳥居の亀腹が残るなど随所に神社時代の遺構の痕跡を確認することができる。

3月11日は台北の郊外に位置する保養地でもある陽明山の清滝神社跡を巡り、台湾神宮跡地の補足調査を行った。台湾神宮跡地では社殿の礎石を確認し、略実測を行った。また、かつての社殿群の区域を確定するための現地検証を行った。



写真5 苗栗稲荷神社跡地。上中下段に分けられた石段等の地形には神社時代の面影を残している。また、石段前には笠木部分が取り除かれた状態の鳥居が今も保存されている。



写真6 苗栗稲荷神社の元の本殿基壇の両脇に立てられた説明板。ガラス板で作られた説明板には苗栗稲荷神社の説明ではなく、一般的な日本の神社の説明がなされている。

おわりに

以上が主な調査内容である。いずれにせよ、台湾の海外神社跡地は韓国などに比べ神社遺構をよく残している。残っているばかりでなく、積極的に復元し忠烈祠として活用する旧桃園神社などのような例もあるほか、市当局や大学が保護管理する苗栗稲荷神社のような例も見られる。そのほか金瓜石神社のように神社遺構を積極的に利用し観光資源として利用しようとする動きもある。日本人から見れば負の遺産としかみえない神社遺構を消し去るばかりではなく、修復し忠烈祠として活用する例では、反面教師の意味合いが含まれていよう。とはいえ神社遺構を文化財指定し、保存・活用を図り、それを観光資源として利用するとなると明らかに評価軸が変わろう。戦後の台湾では、本省人と外省人との間の軋れきも大きい。それらも当然関係してくるだろうが、海外神社を何をもって評価の軸にするのか、価値尺度をどのように考えたらよいか。そのような意味からも、台湾人の心理的・精神的な面からの再検討が必要ではないかと考えている。

研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容 台湾中部の海外神社跡地を訪ねて

中島 三千男
(非文字資料研究センター 研究員)

2013年5月30日(木)～6月3日(月)、台湾中部の海外神社跡地10社の調査を行った。日程等の都合で訪れた、台湾北部・基隆地域の2社を含めて、併せて12社の報告を行う。

同行者は森武鷹大学院歴史民俗資料科学研究科教授、通訳の台湾師範大学大学院生安井大輔氏、それに車の運転をお願いした頼俊良氏の3人である。

調査結果は表1の如くであるが、以下、表中の順番ごとに簡単に状況を報告する。尚、写真は紙数の関係から、一般に知られていない4枚に限定した。

[台中神社]

台中神社は1911年創立、翌年10月に旧台中公園に鎮座。1913年県社に列格、さらに1942年国幣小社に昇格した。県社から国幣小社に昇格するにあたり、社地を移転している。したがって県社までの時代を第1代台中神社、国幣小社時代を第2代台中神社と表す。

第1代台中神社は現台中公園の北門楼北方に建てられた。第2代台中神社は旧台中市新高町41番地水源公園(現、台中市力行路260号忠烈祠)に建てられた。この時、第1代の木造建築(社殿)は取り壊されている。

台中公園内にある、第1代目の神社跡地には、短い参道の両側に17基の燈籠(上部欠け)が残る。小階段を上がると、拝殿基壇前には1対の神馬と狛犬がある。玉垣に囲まれた、本殿基壇部分には孔子像(1973年設置)が立つ。また、参道からやや離れて、石造鳥居(1921年建立)が横倒しにされて保存されており(2000年に整備)、傍には神社の歴史、及びその鳥居の説明を書いた看板が設置されている。

第2代目の神社跡地は現在、忠烈祠等が建てられている。忠烈祠は1972年まで第2代の旧社殿を利用して設けられていたが、1972年の日中国交回復に伴う、日本と台湾の中華民国政府との断交を契機に旧社殿は全て

取り壊され(1974年2月台湾内政部通達「清除台湾日抛時代表現日本帝国主義優越感之殖民統治記念遺跡」)、新しく建て替えられた。今日、神社遺物は全く見ることが出来ない。

[彰化神社]

彰化神社は1927年に社として鎮座、翌年に神社に昇格、1937年郷社に列格された。彰化市の中心街、彰化駅の東側、八卦山の中腹に建立された。この山は日清戦争後の日本の台湾領有時、日本軍と独立を求める台湾側との間に激しい戦闘が行われた場所で、麓には「1895年八卦山抗日保台史蹟館」が建てられている。

社殿跡地には現在大極亭が建てられており、遺跡としてはそこに至る階段が残されているぐらいである。市街から登る参道部分は現在八卦山文化歩道として整備されている。

[能高神社]、[能高社]

神社が所在する埔里は3000m級の山々に囲まれた盆地で、標高380m～700mの丘陵にある。もともと、この地はブヌン族などの原住民が住んでいるところであったが、清朝時代以降に大量の漢人が入植して漢人の支配する街となった。能高神社は1927年、能高社として埔里街の虎仔山(556m)山頂に鎮座。1938年神社に昇格。さらに、1940年に紀元2600年記念事業の一環として、参詣に便の良い、虎仔山の麓に移転、1944年に郷社に列格された。一方、従前の能高社は能高神社の末社として残った(『神道史大辞典』吉川弘文館、2004年の巻末付表「台湾の神社」佐藤弘毅編、には能高神社のみ掲載されている)。

能高神社跡地は現在、国立埔里高級工業職業学校の敷地となっており、また能高社の方は虎仔山地理中心点となっている。遺物としては、同地の醒靈寺に能高神社の

燈籠6基と狛犬1対が移設されている。また、それらとは別に獅子1対が収蔵されているが、これはもと清朝時代漢人によってこの街に城(大埔城)が築かれた時、その門の前にあった獅子で、能高社が建立された時に、その本殿前に安置されていたものである。

[霧ヶ岡社]、[川中島社祠]

1930年10月に、日本統治時代後期の最大の原住民の抗日蜂起、霧社事件(第1次)が起きた。また、翌年4月、投降した蜂起者たちの収容所が、日本側に協力した原住民によって襲撃されるという事件も起きた(第2次霧社事件)。このため、蜂起に関連しながらも最終的に生き残った人々は、1931年北港溪中流域の川中島(現仁愛郷清流部落)に強制移住させられた。

霧ヶ岡社はこの事件後の1932年に鎮座したものである。現在この地には徳龍宮という廟が建っている。川中島社祠は1937年に強制移住させられた地に建てられた神社である。現在は跡地に「霧社事件 余生記念碑」が2基の燈籠を前に立っており(写真1)、脇に2階建てコンクリート造りの余生記念館が建つ。

遺跡・遺物としては、霧ヶ岡社の場合は燈籠3基(彩色、内1基は笠・宝珠なし)、燈籠の笠1個、それに階段である(彩色・改変された鳥居は後補のものである)。川中島社祠の場合は遺物はないが、余生記念館を少し下った所の旧防空壕の脇に、この神社の写真を含む説明板(写真2)が立てられている。

[埔里社]

埔里社は台湾製糖株式会社埔里製糖所の企業内神社(私社)として建てられたものである。したがって『神



写真2 余生記念館付近に立つ川中島社祠説明板

道史大辞典』には掲載されていない。金子展也氏によれば1926年に神社を建立したが、その後、埔里街に能高社が祀られたために、その遥拝所になったとのことである。

現在は小公園となっており、遺跡・遺物としては社殿基壇、手水鉢や鳥居の礎石らしきものが残されている。

[嘉義神社]

多くの遺跡・遺物のある嘉義神社の現況については、津田良樹「台湾の神社跡地調査からみた共同研究の今後の展望」(『非文字資料研究』27号)と重複するのでここでは省略する。ただ、一言だけ付け加えておくと、1998年に火事で焼失した社殿(旧忠烈祠)の跡地に建てられた「射日塔」のことである。この建物は高さ62m、阿里山の神木を模した9階建て(地下が忠烈祠)、円筒型の建物であるが、元々この地は早期台湾原住民の祭壇があった所で、原住民勇士の「射日(太陽を射る)伝説」に基づき建てられたという事である。

[拉拉社祠]

私共は当初、阿里山神社跡を調査する予定で『神道史大辞典』に掲載されている現住所、嘉義県阿里山郷来吉村4隣50号を訪れた。来吉村はツォ(鄒)族の集落で、4隣は来吉国民小学校、阿里山郷公署等がある集落の中心部である。祖父が神職であったという現地の人に尋ねると、確かにここに神社があったという事である。場所は小学校の裏手道路に面した山林のあたりで、今は道路に面し最前部に石組(上部は金網が張られている)があるが(写真3)、全く遺跡・遺物は見つからなかった。

しかし、金子氏やその他によれば、阿里山神社はこの



写真1 川中島社祠跡に立つ「霧社事件 余生記念碑」

研究調査報告

水辺の生活環境史

北九州若松洞海湾における船上生活者の歴史の変容 (その2)

田上 繁
(非文字資料研究センター 研究員)

本研究プロジェクトでは、2011年度の若松調査(ニューズレター27号掲載)に引き続き、2012年度、2013年度と2回にわたって現地調査を実施した。したがって、本報告では、その2ヵ年分をまとめて述べることにしたい。

まず、2012年度は、8月6日から9日までの日程(参加者全員での調査)で、北九州市立若松図書館、わかちく史料館、若松児童ホームなどの各機関を訪ねて資料収集を行った。また、第一港運(株)の岡部秀年会長、船上生活体験者の渋田幸子さん、石橋英子さん、田上キサ子さんの3名(2011年度に続き2回目)、稲益造船(株)の稲益敏幸社長から、それぞれお話をうかがった。

次に、2013年度は、同じ時期の8月5日から8日までの日程(同上)で現地調査を敢行した。このときの調査では、現在も「船食」を経営する中野種数さん、船上生活者であった越智俊充さん(船主)・頼子さんご夫妻から専門的なお話を聞くことができた。加えて、2013年度が本研究の最終年度となることから、中間市歴史民俗資料館、直方市石炭記念館、田川市石炭・歴史博物館に赴き、石炭関係資料の収集と炭鉱跡地の巡見を行った。最終日には、関係図書の閲覧とコピーサービスを受けるため北九州市立中央図書館を訪問した。

この2年間にわたる現地調査により、(1)これまで不明であった洞海湾の船上生活者の実態と、それを取り巻く海運会社や造船会社などとの関係が明らかになってきた。他方、(2)当時の児童ホームに勤務されていた複数の関係者からの聞き書きにより、就学のために児童ホームで寄宿舎生活する児童の暮らしぶりが浮き彫りになってきた。そこで、この2点を中心に、2回の調査で知れた事実を紹介することにしたい。

1. 船上生活者の実態

明治以降の石炭の主要産地が、主として福岡県、北海道、福島県、佐賀県、長崎県、山口県、茨城県の7地方であったことは周知の通りである。しかし、その産出高においては大きな開きがあり、たとえば1906年(明治39年)の統計では、福岡県が全国産額の約65%をしめ、第2位の北海道の約11%を大きく引き離している(『日本炭鉱誌』)。福岡県の中でも筑豊炭田(筑豊5郡)から

は大量の石炭が産出され、遠賀川やその支流を舟(川漕)で運ぶ水運と貨車を利用した陸運により各積出港に移送された。同書の1907年(明治40年)の統計によると、筑豊炭田の石炭送り先別数量646万トン余りのうち、若松港へは504万トン余り(門司回りの分を含む)が搬送されている。こうした石炭産業の興隆にともない、若松港ではさらにそこから瀬戸内海や阪神方面へ輸送する各種の船舶が操業する条件が生まれた。さらなる石炭産業の進展により、1920年代前半(大正末)ごろからは、船上で生活しながら主に石炭輸送に従事する舢舨や機帆船なども出現した。船上生活者による操業は、その後、1970年前後(昭和40年代半ば)まで続く。その内容については、前出2011年度の研究報告で少し触れているので参照されたい。



写真1 舢舨と「うろ」さん(船商)
(北九州市立若松図書館所蔵)

ところで、今回の調査では、実際の船のオーナーとして各種の資材を運んだ経験のある船上生活者(夫妻)からオーラルヒストリーをうかがうことができた。前出の越智さんは16歳から乗船し、1964年に結婚されたのち、夫妻2人で船上生活をしながら輸送業に携わった。主に杉や檜などの木材を積んで、高知や姫路に運んでいたとのことである。そのころは、「焼き玉」エンジンの70トンの船であったが、1968年ごろからディーゼルに代わった。1973年ごろには、350トンの船舶で対馬から洞海湾の戸畑まで鉄鉱石を運搬したこともあったという。しかし、「玄界灘の荒波で搬送が大変であったため、1年ちょっとでやめた」と、玄界灘の恐ろしさを振り返りながら語られた。1980年には若松に移住し、油脂や化学薬品などを運び、結局、夫妻で17年間乗船したと

いう。

越智夫妻の話から、石炭を運ぶ舢舨や機帆船とは異なり、材木や化学製品を運ぶ船上生活者のもう一つの形態があった事実を知りうる。しかも、実際の船のオーナーとして輸送にあたった船上生活者が語る内容であるだけに、船の操業に関してはきわめて実証的である。玄界灘を航海して対馬から鉄鉱石を運んだという話も興味深いものがあり、それが、対馬で採掘されたものなのか、あるいは、他国から移入されたものなのか、今後検証する必要がある。

2. 若松児童ホームにおける寄宿舎生活

昭和初期の段階で、若松港に常時停泊する船舶は2,500艘余りを数え、船上生活者は8,500人以上で、そのうち就学児童が300人以上いたといわれる(『若松市史』)。これら就学児童は、悪天候や雨雪のときは通学ができず、また、急な繋船場の変更により帰船できないこともあったという。そのため、寄宿生活をしながら通学できる若松児童ホームが、1952年に古前小学校の隣に開設された。2012年の調査では、以前、同ホームに勤務されていた中井陽子さん(保育士)、道上みどりさん(栄養士)、ならびに、佐々木偉岸さん(保育士)・和代さんご夫妻からお話をうかがう機会を得た。

前出3名の船上生活体験者の話も交えて総合すると、児童ホームは、1952年から1971年まで「海上生活者」(職員たちの呼び方)の施設であったが、1971年から一般養護児童との混合入寮がはじまったという。一日の基本的な時間割は、6時30分起床と掃除、7時朝食、15時おやつ、15時過ぎに帰寮(低学年)、17時ごろ帰寮(高学年)、17時30分夕食、21時消灯(低学年)、22時消灯(高学年)となっていた。



写真2 表紙に若松児童ホームを描いた記念集
(若松児童ホーム所蔵)

部屋は、1部屋8畳で10名ほどが入り、全部で男子5部屋、女子5部屋があった。いずれも畳ベッドの部屋でこたつがあり、「大きい子と小さい子を一緒に生活させ」、「10人位の中から室長が選ばれた」とのことである。風呂は「一日おき。水は井戸水を利用」していた。寮生活での楽しみの一つは、「ご馳走がある日」が設けられ

ていたことで、誕生日やクリスマス、卒園式などには手作りの巻き寿司やいなり寿司が出された。ときには、「恵まれない子として、野球観戦に招待してくれた」こともあったと船上生活体験者の一人は語る。社会通念として「恵まれない子」と捉えられていたのであろうか。こうした日常生活の中で、土曜日の午後には「海に帰る」という生活を送っていたのである。

当時、この児童たちに対して、社会一般では「船員の多くは伝統的職業にして社会との接触少なく文化の恩恵に浴せざる関係」から、「比較的知識低級にして、子弟教育の念薄く、就学成績極めて不良なり」(『若松市史』)といった評価を与えている。しかし、これは、陸に生活の場を置かない生活形態を特別な目で見ようとする日本人の古くからある考え方に基づくものであり、このような偏った見方を是正する意味でも船上生活者の真の姿を追究しなければならないであろう。

もとより洞海湾の船上生活者は、その生業に最も適合した形をとって一年中船上で暮らし、石炭産業の発展とともにその重要な輸送部門の一端を担ったのである。現地調査ではこのほかにも、わかちく史料館の島中久和館長からは、洞海湾における港湾事業の歴史、海運会社の岡部会長からは、船上生活者の出身地や1965年の港湾労働法の公布を契機に船上生活者が減少、消滅していった経緯などを聞かせていただいた。また、「船食」の中野さんからは、海上雑貨販売商の「うろ」さんのことや朝鮮戦争特需の件、造船所の稲益社長からは、船の構造や造船所の所在地のなどをうかがった。いずれも船上生活者の実態を解明する上では不可欠なお話ばかりであった。ここでは紙幅の関係から細部の引用は割愛するが、今年度は研究成果のまとめの段階に入っており、協力してくださった方々のお話はその中で十分活用させていただきたいと思う。

◎調査参加者：2012年度は森武磨・安室知・田上繁(以上研究員)、安田常雄(歴史民俗資料科学研究科教員)、松本和樹(同研究科博士前期課程)。2013年度は安室知を除く、4名の同じメンバー。また、両年度とも若宮幸一(研究協力者。旧古河鉱業ビル館長)が参加。

[付記] 文中に登場する方のほかにも、オーラルヒストリーの語り手を紹介していただいた野村省子さん、学生アルバイト時代に岬の山で船上生活者に米を売った話を聞かせてくれた木村文男さん、洞海湾に関する写真の提供と若松の歴史を教えてくれた家次寛さんたちにも大変お世話になった。また、回漕店を営んでいた坂本公さんの子息の妻坂本孝子さん、若松在住のやきとり屋「一ちゃん」の女性店主からも貴重なお話をうかがった。改めてお礼を申し上げたい。

研究調査報告

東アジアの租界とメディア空間 戦後初期の香港におけるグラフ雑誌の出版状況についての覚書 — 『東風』画報と『亜洲』画報を中心に —

村井 寛志
(非文字資料研究センター 研究員)

筆者はかつて両大戦間期の上海で租界を中心に花開いた大衆文化の萌芽が香港や華僑のネットワークと密接な関係を持っていたことを、上海で出版されていた『良友』画報(1926～45)を中心に論じた¹。2013年5月24日の租界メディア班の報告では、抗日戦争期の『良友』や、戦後香港で創業者伍聯徳によって創刊された同「海外版」などの分析を通じ、それらのネットワークが戦後の香港へとどのように引き継がれていったかを考察した。

とはいえ、戦後の香港の出版事情についてはいまだ明らかでない点が多く、そこで同年8月の調査では、戦後初期の香港において出版された『良友』以外の画報の事例として、香港大学、香港中文大学が所蔵する『亜洲』画報、『東風』画報、『長城』画報など、1940年代末から50年代初頭の画報について調査を行った。それぞれ数百期まで出されたもので、そのうちのごく一部とはいえ、コピー、撮影してきたものはかなりの量になる。詳細な検討には時間を要するが、以下では『東風』と『亜洲』を中心に、気がついた点を記したい。

1. 『東風』画報

香港中文大学が所蔵する1948年の第16期から1963年の第794期までを中心に閲覧した(ただし欠号が非常に多い)。香港大学 Special Collectionにも所蔵があるが、同書庫内資料は複写、撮影等が認められず、利用に不便なため、中文大のものを中心に閲覧した。

『東風』画報は戦後の香港ではかなり早い時期に創刊された大判の総合的画報で、30年以上の長きに渡って継続した。1947年10月19日付の創刊号には発行者(督印人)兼編集長〔総編輯〕鄭郁郎、印刷者胡璋榮、出版社東風有限公司などの情報が掲載されていたようだ

が²、筆者が閲覧できた16期以降の出版情報欄には編集者などの情報が一切記されていない。鄭郁郎の経歴も詳細は分からないが、韋基舜『吾土吾情Ⅲ』(成報出版社、2006)では、1968年当時『星島日報』編集長をしており、「公共關係(公關)」の訳語によって、Public Relations(PR)の概念を香港に導入・定着させた人物として紹介している(69頁)。

創刊号を例外として、筆者が閲覧した限りいずれの号も表紙に女性のポートレート写真を用いており、『良友』以来の上海の総合画報のスタイルを踏襲している(図①)。第132期(1950年5月27日)の標題紙では、当時の人気女優、「読者〔読友〕」李麗華が『東風』のバックナンバーを読んでいる写真が掲載されている(図②)。李麗華は1948年以降活動の場を上海から香港に移した人気女優で、解説記事では、「十数年前も私は時々画報を読んでいたが、当時は本屋に入ったついでに『良友』を買うという程度だった。今は『東風』を毎号読まないと気が済まない」という李の言葉を紹介している。上海の『良友』から香港の『東風』へと大衆向け画報の系譜が意識されていたことが窺われよう。



図① 『東風』39期表紙(胡風)

1 拙稿『『良友』画報と華僑ネットワーク—香港・華僑圏との関連からみた“上海”大衆文化史—』(『東洋史研究』66-1、2007年)。

2 連民安編著『創刊号[1940's-1980's]』(《明報周刊》出版社、2012年)、19頁。



図② 『東風』を読む李麗華(『東風』132期)

『東風』第16期の表紙の下部には、香港・中国以外に、東南アジア各地から北米、南アフリカに到る、各地での年間購読料が英文で記されており、これらの地域の読者を想定していたことが窺われる。1949年末頃から(確認できたのは第106期、1949年11月28日から)文通相手を求める各地の読者の投稿を紹介する欄が設けられており、各地の読者が、性別、年齢、趣味などの自己紹介をし、住所を記している。画報が海外華僑・華人読者間の情報交換の場として機能していたことを窺わせ、これについては今後分析を深めたい。

2. 『亜洲』画報

香港大学 Special Collection 書庫に創刊号(1953年3月)から第39期(1956年7月)までを所蔵しているが(欠号多数)、既述のように同書庫の文献は複写、撮影禁止で、画報の研究に利用するには致命的である。保存状態が良くなく、虫食いや破損がひどいので慎重な扱いはやむを得ないとしても、デジタル化して公開するなどの処置が望まれる。

なお、香港中文大学図書館にも、第9期(1954年)以降、わずか5冊ながら所蔵されていることが検索で分かるが(最後のものは第215期、1971年)、申請したもの、目下所在不明ということで、閲覧することが出来なかった。次回訪問時に再度確認したい。

奥付の記載によれば、出版人が張国興、総経理が蘇源昌、総編輯が黃震霆、画報主編が蔡漢生、出版、販売が亜洲出版社となっている。張国興(1916～2008)は

海南島の貧しい家庭の出身で(後、父が英領ボルネオで出稼ぎ)、日中戦争中は昆明の西南聯合大学に入り、1944年には中央(通訊)社、1947年には米UP社に入社した。1952年以降、アメリカのアジア財団の支援により、香港で亜洲通訊社、亜洲出版社、亜洲影業公司を立ち上げた³。

このアジア基金は1951年に活動を開始したアメリカの財団だが、「表面上は民間団体であるが(中略)国家安全保障委員会に認可されており、連邦議会の監督委員会の知識を持ち、CIAから密かに間接的に助成されていた⁴」というように、冷戦下のアメリカの広報戦略の一翼を担うものであった。同誌「創刊詞」では「いかなる党派にも縛られず、いかなる団体のためにも発言しない」と謳っていたが(第1期)、『亜洲』画報の背景には明確な反共イデオロギーが存在しており、時事問題の報道などからも見て取れる。

とはいえ、時にそうした露骨な政治的主張が垣間見えるものの、同誌の内容の多くは、映画やスポーツ、異国の風景など娯楽的な内容である。また、広く海外に販売網を持ち、華僑華人の読者投稿を多く掲載していることも『東風』画報などと共通している。これらの画報の共通点と相異点を明らかにしていくことが今後の課題となろう。

民国期中国の雑誌は主要なものが次々復刻されているが、香港ではそのような条件がなく、多くの場合現地に行き実物を見るしかない。しかも大学図書館の収集も不十分であり、全貌を知ることは難しいが、今回の調査中、連民安編著『創刊号』(2012年)(注2参照)の出版を知った。同書は学術書ではないが、図書館に所蔵されていない個人収集家所蔵の資料を多く使用しており、当時出版された代表的な出版物の概要を知ることができる。こうした民間の所蔵資料へのアクセスの可能性については、今後の課題としたい。

3 黄仁『中外電影永遠的巨星』(秀威資訊科技股份有限公司、2010年)、179～180頁。

4 キンバリー・グールド・アシザワ「アメリカのフィランソロピーは日本にどう向き合ったのか」(山本正編著『戦後日米関係とフィランソロピー—民間財団が果たした役割・1945～1975年—』、ミネルヴァ書房、2008年)。アジア財団が日本や香港で行った様々な助成活動に関しては、李培徳(今井就徳訳)『戦後香港と日本におけるアジア主義—錢穆と太田耕造—』(松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか—記憶・権力・価値—』、ミネルヴァ書房、2013年)を参照。

研究調査報告

『ヨーロッパ近代生活絵引』 編纂共同研究

ミュンヘンとウィーン—18世紀ヨーロッパにおける二つの首都の肖像—

 ステファン・ブッヘンベルゲル
 (非文字資料研究センター 研究員)

2013年8月6日～8月22日まで『ヨーロッパ近代生活絵引』班の調査でミュンヘンとウィーン、2つの都市を訪問した。

ミュンヘン

18世紀には選帝侯の居城都市であったミュンヘンは、1806年、ナポレオンの恩恵によりバイエルン王国の首都となった。このことにも原因があるのかもしれないが、18世紀のひとびとの生活を調べることのできる、ミュンヘン市を描いた画像資料は比較的乏しいのである。18世紀はまだ、絵画の眼目はなによりも宗教画にあったのだ。これは、バンベルクやレーゲンスブルクなど、他のバイエルンの都市にも当てはまる。そのようなミュンヘン都市図は、ミュンヘン市博物館には6つしかない上、その6つにおいても、人間にはずっと下の役割しか与えられていない。所蔵のうち、ミュンヘン市の肖像とも言うべき絵画の主なもの、19世紀に由来するのである。

とはいえ、当時の傑出した街景図画家、ベルナルド・ペロット(1720-1780年)、またの名カナレットは、ミュンヘンに滞在していた1761年に、ミュンヘン市の景色を3つ、ニュンフェンブルク城の様子を2つ、イーザル



図1 ハイットハイゼンから望んだミュンヘン(ベルナルド・ペロット、1762-67年頃)
 出典 Wikimedia Commons(著作権の制約が無いデータベース)



図2 ミュンヘン・マリア広場の市場(ミヒャエル・ヴェーニング、1701年頃)
 出典 Wikimedia Commons

川の右岸から市を覗いたパノラマを1つ、絵にしている。ハイトハウゼンは当時はまだ小村であったが、百万もの居住者を抱えるミュンヘン市の一部となって以来、すでに久しい。

ミヒャエル・ヴェーニング(1645-1718年)の銅版画は、ミュンヘン市の生活のありさまを詳細に見せてくれる。彼は4巻にわたる主著『バイエルンの歴史と地誌』(1710-1726年)で、ミュンヘンの4つの財務庁や、城や僧院などの建物も含めたブルクハウゼン、ランズフート、シュトラウビングなどの地のありさまを、およ



図3 マリア広場のマリア柱(2011年)
 出典 Wikimedia Commons

そ千もの銅版画に録したのみならず、街景図や戦闘図をも版画に刻した。ミュンヘン市自体の景色はそのうちの25にのぼる。

彼の名高い版画「ミュンヘン・マリア広場の市場」に彫られた街景のうち今日に遺っているのは、マリア柱と背景の聖母教会を除けばほとんど無い。第二次世界大戦が市を破壊し、19世紀に新市庁舎が建てられたからである。マリア広場自体は1972年以来、歩行者天国となっている。

ウィーン

同じ時代のウィーン市の肖像は比較にならないほど多い。ハプスブルク帝国の首都として、18世紀のウィーンはミュンヘンよりもはるかに重要であり、人口も多く、文明も進んでいたからである。ウィーン博物館、美術史博物館、造形アカデミーの絵画ギャラリー・銅版画コレクションには、絵画や銅版画が多く収蔵されている。特筆すべきは、ミュンヘンに旅する前の1759年から1861年の間にペロットが描いた13の街景画である。

ウィーンが都市として遂げた発展のありさまをとりわけよく伝えているのは、「居城都市ウィーン」に収めら



図4 ウィーンの炭市場通り(カール・シュッツ、1786年)
 出典 Wikimedia Commons



図5 炭市場通り(2012年)
 出典 Wikimedia Commons

れた、カール・シュッツ、ヨーハン・ツィーグラ、ラウレンツ・ヤンシャの57の手彩色銅版画(1779-1798年)である。これらの銅版画は、当時大いに人気を博した。

ウィーン王宮が近いことから、炭市場通りには18世紀から、砂糖菓子屋のデメルなどさまざまな御用達の店が移り住んだ。今日の炭市場通りは、国際的なブティックや宝石店が並ぶ、贅沢な買い物街である。



図6 フライウングのショットン広場(ヨーハン・アーダム・デルゼンバッハ、1740年)
 出典 Wikimedia Commons



図7 ダヌベ川から見たアルタン・プトン宮殿(ヨーゼフ・エマヌエル・フィッシャー、1720年)
 出典 Wikimedia Commons

バロック時代のウィーンの様子は、言うまでもなく、もっと早くから銅版画に録されていた。例えばヨーゼフ・エマヌエル・フィッシャー、ヨーハン・アーダム・デルゼンバッハの手による1719年の諸作品においては、当時の貴族文化が前面に出ている。これら2種類のコレクションにより、成熟した貴族社会からますます都市性を増してゆく社会へとウィーンが変遷するさまが、良く迎えられるのである。

研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容
旧トラック諸島の神社跡地稲宮 康人
(非文字資料研究センター 研究協力者)

地図1 旧南洋群島地図



地図2 旧トラック諸島地図

この島々の歴史を簡単に振り返ると、初めスペイン領であったが、その後ドイツに買収され、第一次世界大戦後に日本の委任統治領となった。日本海軍の基地が置かれ、一時連合艦隊の停泊地になった。1944年2月17、18日には米軍による大規模な空襲があり、トラ



写真1 春島神社跡。手水鉢。左下は石垣の一部。

2013年10月3日から7日にかけてミクロネシア連邦チューク諸島において日本時代に作られた神社跡地の調査・撮影を行った。調査を行ったのは、モエン島(旧・春島)の春島神社、ダブロン島(旧・夏島)の都洛神社の2箇所である。

西太平洋にあるチューク諸島は日本時代にはトラック諸島と呼ばれ、南洋庁トラック支庁が管轄していた小さな島々である(地図参照)。トラック諸島は春夏秋冬の四島からなる四季諸島と、月曜から日曜までの名が付けられた七曜諸島という主な島々と多数の小島からなっていた。日本時代、トラック諸島の中心はトラック支庁があった夏島であり、春島は北端と南端に飛行場がある軍の島であった。今はモエン島がチューク諸島の中心地になり、軍の飛行場はチューク国際空港へと変わっている。



写真2 春島神社跡。画面中央下の左右に石の基壇が写っている。

ク諸島に配備されていた航空機約300機と多数の艦船が破壊された。戦後はアメリカの信託統治領になり、1990年にミクロネシア連邦として独立した。今でも海中に多くの日本軍の船や飛行機が沈んだままになっており、世界中のダイバーを惹き付ける場所になっている。

10月4日、モエン島で春島神社跡地の調査を行った。佐藤弘毅作製の海外神社一覧に春島神社の記載はないが、今回ガイドをお願いしたトラック・オーシャン・サービスの末永氏が、日本時代を知る現地人や慰霊の為に訪れた日本人への聞き取りによって確認した神社である。火山島であるモエン島の中心部はかなりの山になっており、春島神社はその山の稜線にある。神社跡地に辿り着くまで小一時間山を登る。少し崩れた石の階段を上り、稜線上のコブの上にとると、手水鉢(写真1)や本殿跡

と思われる石の基壇が残っている(写真2)。基壇は鬱蒼とした熱帯の森に覆われ、注意深く見ないと判らない。基壇の大きさは一辺2~3m程の四角形。手水鉢は基壇から5mほど離れた森の中にあり、その周辺には山の斜面を覆う石組みも残っている。小祠というほどの神社であったと推測される。神社のある山の麓には陸軍が駐屯していたと聞いたので、営内神社であった可能性も考えられる。

10月5日は都洛神社跡地調査の為、ダブロン島に渡った。モエン島からポートで30分程の距離にある。小笠原省三の著作には夏島神社とあり、佐藤のリストには都洛神社とある。紀元二千六百年を機に境内を拡張したと聞いたが、その時に併せて改名をしたのかもしれない。都洛神社は旧中心街から少し山を登ったところにあ



写真3 都洛神社跡。画面右下にコンクリートの本殿跡。男の子が立っている場所は現地の人が通る道になっており、基壇の一部が剥き出しになっている。

り、ジャングルに覆われていた。今は島に住む人も少なく島全体が森に覆われ見晴らしが利かないが、当時は町や海を見下ろすような場所であったと思われる。本殿基壇(写真3)、階段、石畳、石畳脇の側溝、鳥居(写真4)を確認することができた。道から神社境内へと続く階段は土手を大きく削って作られており(写真5)、かなりの規模であったことが判る。鳥居は丸い石材が草木に埋もれていたのを確認しただけであるが、形状から見てほぼ間違いないと考えられる。旧境内は全てジャングルに覆われており、詳細に調べることは無理であったが、全体の概要は把握することができた。神社境内地を撮影していると、オレカ地

主だから金を払えと三人の島民が別々にやって来た。この神社跡地は戦後土地を手に入れた人が死に、その子供・親戚などがそれぞれに所有権を主張し金を請求してくるので手に負えない、と聞いた。こうした事情から大人数による調査は難しいかも知れない。

なお西牟田靖『写真で読む僕の見た「大日本帝国」』掲載の都洛神社跡の写真は小学校跡地であり、神社跡地ではない。旧トラック諸島の神社跡地を紹介しているのはこの本しかなかったため、誤りを指摘しておく。

(地図1・地図2出典 朝日新聞 昭和19年2月19日)



写真4 都洛神社跡。倒れた鳥居の根元か。離れた場所には短い丸い石柱もあった。画面左は石の階段。



写真5 都洛神社跡。境内入口の階段。回りにはマンゴーの樹が生い茂る。

利他的行動は複雑なシステムを攻略するカギになるか？

宮田 純子 (非文字資料研究センター 研究員)

スマートフォンやパーソナルコンピュータの爆発的な普及により、日々の生活でインターネットを使う機会が増えてきました。たくさんの方がインターネットを利用し、毎日データをやりとりしていると思います。そのやりとりを不満なく行うために、私は、情報ネットワークにおいて工学的な立場から、理論的な解析を行っています。工学分野においては、実際に使用されている(これから使用される可能性のある)ネットワークシステムを対象に、そのシステムのシステム効率を上げるように、システム内の特性を考慮しながら制御方針を決定します。このような制御方針を決定するためには、システム内の特性のシミュレーションや、問題のモデル化などにより、システム内の特性を把握する必要があります。この解析に必要な技術は、近年のコンピュータの計算能力の向上により、飛躍的に進歩しました。一方で、最初にも述べたように、端末の高度化と小型化により、インターネットに接続される端末数や通信量は爆発的に増加しています。そのため、高度に発達した計算機や複雑なモデルを用いたとしても、通信システムの最適な制御はまだ容易な問題とはいえません。

ここで、いちどシステムを制御する側から離れ、システムを利用する利用者のことを考えてみましょう。一般に、利用者は、自分の要求に従ってシステムを使います。例えば、いますぐメールを送りたい、いますぐ動画を高画質モードで見たい、というような使い方です。このように自分の要求に従って行動するユーザーを「利己的ユーザー」とよびます。しかし、利用者は一人ひとり個性を持った人間であり、状況や環境に応じて行動を変えようと考えられます。例えば、みなさんもご経験があると思いますが、年末年始に友人に送るメールは、大変混雑することが経験上明らかになっているため、送りたい要求はあるものの、あとから送るといった行動をとることもあると思います。また、動画を見ている際に、ネットワークの環境が悪く、画質が悪いと感じた場合には、画質を落として見る方もいると思います。

これらの行動は、利己的ユーザーの行動というよりは、状況に応じて行動を変える(または他人のために自らの行動を変える)「利他的ユーザー」の行動であるといえます。このような利他的ユーザーの行動は、有限なネットワーク資源の輻輳(ふくそう)緩和になるため、システムの効率化にとって重要な役割を果たすでしょう。図1に示すように、これまでは技術的な観点、ビジネス的な観点、ユーザーからの観点から個別に研究されてきましたが、これからは技術面のみならず、ユーザーの行動も考慮した制御方法を考察する必要性が増すと予想されます[1]。したがって、より複雑で高度な制御を必要とするこれからの制御では、ユーザーの行動にも着目した制御というのが大事になってきます。これまでに、私は待ち行列理論やゲーム理論を用いて、これらの利他的ユーザーの行動を考慮した制御について研究を行ってきました。

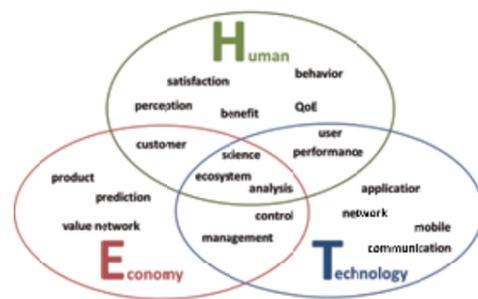


図1 ネットワーク制御における多方面からのアプローチ

例えば、図2に示すように、通信を新規にネットワーク内への収容可否を判断する受付制御に関して、利他的行動を考慮したものを提案しています[2]。既存の受付制御方式では、各ユーザーが他のユーザーに影響されず利己的に振る舞うことを仮定しています。そのため、仮に、他のユーザーの接続状況に影響されて、他のユーザーのために自らの要求を下げる利他的で協力的なユーザーも存在する場合には、既存の受付制御方式は最適な制御とはならない可能性があります。制御が最適でないということは、有限なネットワーク資源を効率的に使用できていないこ

とを意味します。そこで、私はユーザーの利己的および利他的な振舞いを待ち行列理論を用いて解析し、ユーザーの振舞いも考慮するという新たな観点による受付制御方式を提案しています。図2に示してありますように、各ユーザーの要求する帯域をトラヒック状況によって下げる協力行動をとることで、利他的ユーザーの行動を考慮しない方式よりも、利他的行動を考慮した方式の方が、ネットワーク資源を効率的に使用できることを明らかにしました。

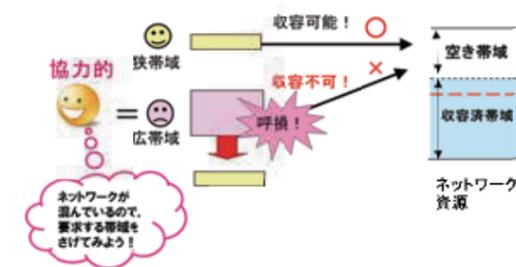


図2 利他的ユーザーの行動を考慮した受付制御

また、図3に示すように、無線環境において無線アクセスポイントに接続する際のアクセスポイント選択方法についても、ユーザーの利他的行動を考慮した制御方法を提案しています[3]。無線LAN環境では、端末を持つユーザーとアクセスポイントとの距離が異なる場合、無線端末ごとに伝送レートも異なるマルチレートになります。そのため、このようなマルチレート無線LAN環境では、極端に低い伝送レートを得た端末の影響で、システム全体の効率が下がること(Performance Anomaly)が知られています。そこで、この問題を解決するために、到着した新規ユーザーを接続する前に、ユーザー自身が許容できる範囲でアクセスポイントに向かって「物理的に移動する」という協力行動をとることで、ユーザー自身のQoS(Quality of Services)である新規ユーザーのスループットを保ちつつ、システム全体のスループット最大化を実現する新しい最適アクセスポイント選択法を提案しました。文献[3]では、この制御によってシステム全体のスループットを向上できることを数値計算によって示しています。

私は、2012年度に神奈川大学へ着任して以降、神奈川大学非文字資料研究センターの研究員の一人としても研究を行っております。一見すると、非文字資料研究センターの研究と、いま述べたようなシステム解析の研究は、まったく異なるフィールドの研究であると思われるかもしれませんが、じつは非文字資料の研究にお

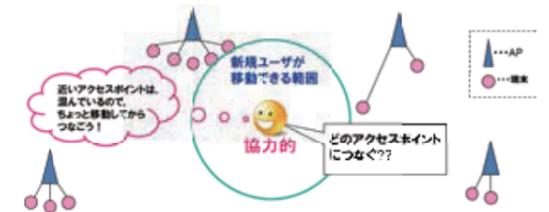


図3 利他的ユーザーの行動を考慮したアクセスポイント選択方式

いても、ユーザーの行動に着目したシステム解析は重要な役割を果たすと考えています。

非文字資料研究センターでの研究は、非文字資料の収集・整理・保存、公開・発信システムの開発研究を行います。その際、膨大な量の非文字資料データを解析する必要があります。もちろん、大量の時間と大量の計算機を用いれば、膨大な量の非文字資料データを解析することは可能かもしれませんが、非文字資料のデータベース化や、実際の検索方法など、システム側で制御できることも多々あると思います。しかし、これらの制御では、ネットワーク資源が有限である限り、必ず限界が来るはずです。

そんなとき、利用者の行動を考慮した制御を導入することで、膨大な量の非文字データ解析を、より効率的に行うことができる可能性があります。とくに、利他的なユーザーの行動を考慮すれば、システムにとって計算負荷を減らすことができるでしょう。このように、ユーザーの行動に焦点をあてることは、計算能力の向上のみに頼らずに複雑なシステムを効率よく制御するための新しい道標になるのではないのでしょうか。

[1] K. Kilkki, "Quality of Experience in Communications Ecosystem," Proc. J.UCS Special Issue, pp. 615-624, Apr. 2010.
 [2] Sumiko Miyata, Katsunori Yamaoka, Hirotsugu Kinoshita, "Optimal threshold configuration with equality based call admission control with cooperative users (mixed loss and delay system)," In Proc. of IEEE ICNC 2014, Feb. 2014(accepted).
 [3] Sumiko Miyata, Tutomu Murase and Katsunori Yamaoka, "Novel Access-Point Selection for User QoS and System Optimization Based on User Cooperative Moving," IEICE Transactions on Communications, Vol. E95-B, No.6, pp.1953-1964, Jun. 2012.

書評

山本志乃著 『女の旅 - 幕末維新から明治期の11人』 (中公新書)

富澤 達三 (非文字資料研究センター 研究協力者)

本書は、幕末から明治期を生き抜いた女性11人の「人生を賭けた」旅を、豊富な資料から具体的に紹介する。以下、章立てに沿って紹介したい。

「第1章 田上菊翁—二歳で未亡人となった美濃派俳人の全国漂泊」。田上菊翁 (1753-1826) は長州に生まれ、22歳で夫と死別したのち、俳人となり40年間にわたる全国文学修行の旅を成し遂げた。「第2章 松尾多勢子—尊王思想に傾倒した豪農妻の京都出奔」。松尾多勢子 (1811-94) は信州伊奈の豪農の家に生まれ、50代初めに平田派国学に心酔、京都にのぼり勤王の志士たちと交流し「勤王の女志士」と称された。

「第3章 檜崎 龍—龍馬妻の新婚旅行から、夫没後の上京苦譚」。檜崎龍 (1841-1906) は坂本龍馬の妻・おりょうである。龍馬とおりょうは日本初の新婚旅行を行ったことで有名だが、龍馬死後のおりょうは各地を転々とし、横須賀で再婚し終の住処を得た。「第4章 岸田俊子—民権派女弁士の全国遊説」。岸田俊子 (1861-1901) は京都に生まれ、18歳で宮中文事御用掛職を経て結婚するも離婚、自由民権運動に身を投じ「初の女弁士」として人気を集め、大阪を拠点に各地を遊説する。民権運動の時代は去り、再婚した俊子は夫を支え、横浜での安定した暮らしを得るが、40歳の若さで亡くなっている。

「第5章 津田梅子—六歳での米国留学、日本語忘却後の苦難の日々」。武士の娘であった津田梅子 (1864-1929) は、わずか6歳で初の官費留学生として米国に渡り、獲得した知識を女子教育に生かした立志伝中の女性である。立身出世が国家の利益に直結するという考えが、広く信じられていた時代ではあったが、梅子の旅は決して順風満帆なものではなかった。「第6章 花子—旅芸人が見た二〇世紀初めのヨーロッパ」。尾張の貧農に生まれた太田ひさ (1868-1945) は幼少期に売られ、芸者・旅芸人となり、花子の芸名でヨーロッパ興行で注目されて、彫刻家ロダンの作品「死の顔」のモデルとなる。離婚や興行の失敗など、激動の芸人人生の旅は成功し、花子はロダンの作品2点を携え帰国した。

「第7章 野中千代子—女性初の富士山“越冬”八二日の記録」。夫とともに厳寒の冬期富士山観測に挑んだ、野中千代子 (1871-1923) の冒険の旅である。「第8章 クーテンホーフ光子—欧州渡航と第二の故郷ボヘミアへの思い」。オーストリア・ハンガリー公使と国際結婚した青山光子 (1874-1941) は、外交官の妻として各国を旅行し、夫の帰国時には客船・鉄道と最先端の交通機関を使用している。彼女は欧州社



交で活躍するが、日本に帰ることはなかった。「第9章 河原操子—蒙古王室、教育顧問のアジア紀行」。5章の津田梅子は教育者として、女性たちを世に送り出したが、本章の河原操子 (1875-1945) も津田以上の過酷な旅ののち、内蒙古で女子教育の道を拓いた。「第10章 山野千枝子—ブロードウェーから東京へ、美容院開業」。山野千枝子 (1895-1970) は「写真婚」で日本人移民の男性と結婚し渡米、ニューヨークで美容技術を取得、東京丸の内美容院を開業する。「第11章 イザベラ・バード—明治初期、日本を駆け抜けた英国旅行作家」。明治初期、東北から北海道を探検したイザベラ・バード (1831-1904)。本書では彼女だけが、純粋な旅行目的で日本を訪れている。外国人女性にとって過酷であった日本旅行に果敢に挑み、彼女が体験した等身大の日本の姿は、『日本奥地紀行』としてまとめられ、不滅の輝きを放っている。

本書で紹介された11の旅は、日常生活を忘れる物見遊山=現在という「観光旅行」ではない。旅を終え、結果的に自らの糧となるが、獲得した知識や経験を何らかの形で若い世代や社会に還元しなければならない。明確な目的を持ち、故郷を遠く離れた地を目指し、目的を達成するか、何がしかの成果を得て帰還する旅。長い漂泊の暮らしの末、安住の地にたどり着き、そこで生涯を終える旅。長くつらい、文字通り命がけの女性の旅は、まだまだ無数にあったことだろう。本書の続編を期待したい。

受贈図書一覧 (書籍・雑誌) (2011年11月～2013年11月)

タイトル	発行所
愛知学院大学 文学部紀要 第42号	愛知学院大学文学会
アイヌと松前の政治文化論 一境界と民族	校倉書房
コンフリクトの人文学 第1号～第5号 The Gender Politics of War Memory: The Asia-Pacific and Beyond	大阪大学大学院人間科学研究科 グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文学国際研究教育拠点」
大田区まちなみ・まちかど遺産 六郷用水	大田区立郷土博物館
コレクター—気谷誠の眼 鯉絵とボードレール	気谷陽子
日本歴史災害事典 関東大震災 1923年、東京は被災地だった 地震の社会史 安政大地震と民衆	北原系子
工場まちの探検ガイド 大田区立郷土博物館紀要 第19号、補遺	北村 敏
Civil Engineering Consultant 【建設コンサルタンツ協会誌】	建設コンサルタンツ協会
神女大史学 第29号 2012.11	神戸女子大学史学会
文学研究科論集 第40号	國學院大學大学院文学研究科学生会
「日本統治時代 (1895-1945) 絵葉書—台湾風景ポストカード」3巻 原題:「日治時代 (1895-1945) 絵葉書—臺灣風景明信片」 臺灣学 系列講座專輯 第四集 第五集 臺灣学研究 第13期 第14期 台湾学通信 2012年合訂本 【第61～72期】	國立臺灣圖書館
日治時代臺灣宗教政策下之神社建築 List of Publications Received No.15	國立臺北藝術大學 國際弘教学大学院大学
歴博 No.168	国立歴史民俗博物館
ブラジル日本移民百年史 第三巻 生活と文化編 (1) 都市文化研究 第一編 都市文化史 回顧と展望 上海城区史 上下巻	サンパウロ大学 森 幸一 上海師範大学
日本思想文化研究 第4巻 第2号 (通巻第8号) 神道フォーラム	NPO法人 神道国際学会
人間文化 VOL.30～33・33別冊・34	公立大学法人滋賀県立大学人間文化学部
京都の歴史災害	思文閣出版
京城旧事 老北京民俗展 発典	首都博物館
グローバル研究叢書 No.3 グローカリゼーションと文化移転 グローバル研究叢書 No.4 グローカリゼーションと越境 Theories about and Strategies against Hegemonic Social Sciences CGS ワーキングペーパー No.6 地域共同体の文化実践とポピュラー文化の関係性—岐阜県東濃地区の文化実践を事例に— CGS ワーキングペーパー No.7 グローバル社会の変動に関する経済学的接近 CGS ワーキングペーパー No.8 文化表象のグローバル研究 —研究成果中間報告— CGS ワーキングペーパー No.9 ソーシャルビジネスは東北被災地に何をもたらすか? バングラデシュを事例としたグローバル研究からの考察 2011年度シンポジウム報告書 日本のポピュラー音楽をどうとらえるか—グローバルとローカルの相克— 2012年度シンポジウム報告書 日本のポピュラー音楽をどうとらえるか2—ローカルからグローバルへの逆照射— Seijo CGS Reports No.1 Promotion and Reception of Japanese Culture in Bulgaria Seijo CGS Reports No.2 Indigenous Intermediaries in the Exploration of Africa and Australia Seijo CGS Reports No.3 Desafio y Alternativas para la Globalización:Caso de México	成城大学グローバル研究センター
西北民族研究 72・74・77・78	西北民族大学 西北民族研究 編集部
文化遺産 2011.4・2013.4 中国非物質文化遺産保護 友展報告 2011 中国非物質文化遺産保護 友展報告 2012	中山大学中国非物質文化遺産研究中心 編集部
民族語文 2011.5～2013.4	中国社会科学院民族学与人類学研究所
只見町文化財調査報告書 第15集 【只見町内遺跡試掘調査報告書—荒井鉦跡、黒谷鉦跡】 只見町文化財調査報告書 第16集 【只見町内遺跡試掘調査報告書—七十苅遺跡】 只見町文化財調査報告書 第17集 【七十苅遺跡発掘調査報告書—伊南川広域河川改修工事に伴う発掘調査報告書】	只見町教育委員会
Art Anthropology 07号	多摩美術大学 芸術人類学研究所
Wind Effects News vol.25・26・29・30 Wind Effects Bulletin vol.18	東京工芸大学研究科 風工学研究センター



東京大学史料編纂所附属 画像史料解析センター通信 第55号 2011年11月	東京大学史料編纂所附属 画像史料解析センター
無形文化遺産研究報告 第6号・第7号	東京文化財研究所
第20回 遠野物語ゼミナール2013 佐々木喜善の世界 没後80年記念	遠野物語研究所所長
『日本漢文学研究』第7～8号	二松学舎大学東アジア学術総合研究所
ニューズレター「雙松通信」第16～18号	
『二松学舎大学附属図書館蔵 奈良絵本『保元物語』『平治物語』』	
日本コロムビア100年史	日本コロムビア株式会社
日本写真年鑑 2013	公益社団法人 日本写真協会
農文協 図書目録	(社) 農山漁村文化協会
農文協通信	
資料室ニュース vol.45・47～51	阪神・淡路大震災記念と防災未来センター
人と防災未来センター 災害ミュージアム研究塾2012	
3.11キョクノキョク 市民が撮った東日本大震災ー「3.11キョクノキョク」写真展ー	
경성의 모던길	漢陽大学校
Journal of East Asian Cultures 52	漢陽大学校 東アジア文化研究所
Cultural Interaction Studies in East Asia	東アジア文化交渉学会事務局
Journal of Cultural Interaction in East Asia Volume3 2012	
『科学技術動向』No.126～133	文部科学省 科学技術・学術政策研究所 科学技術動向研究センター
モダン横浜案内	吉崎雅規
図解案内 日本の民俗	福田アジオ
府中市美術館だより vol.35～37	府中市美術館
かいじあむ通信「交い」第26号～31号	山梨県立博物館
新横須賀市史 別編民俗	横須賀市
市史通信第17号	横浜開港資料館
開港のひろばNo.121	
ハマ発ニューズレター第20号	
企画展 被災者が語る関東大震災	
横浜市史資料室 紀要 第2号・第3号	横浜市史資料室
報告書「ヨコハマの台所」～高度経済成長期の横浜市中央卸売市場～	
報告書「横浜の文化人と戦後復興」	
写真パネル展「占領軍のいた街ー戦後横浜の出發」	
公開講座「横浜から昭和を探るー新しい昭和史像を求めて」	
企画展「横浜の海七面相 大正・昭和編」のご案内	横浜都市発展記念館
学芸員 NEWSLETTER 第25号	立命館大学 文学部
京都歴史災害研究 第13号	立命館大学 歴史都市防災研究センター
遼寧省博物館 館刊 2011	遼寧省博物館
GRADUATE STUDIES MARYLAND INSTITUTE COLLEGE OF ART	MICA

国際常民文化研究機構関連イベントのご案内

共同研究グループ 合同成果発表会（公開） 「魚と人の関係史」	日時：2014年2月15日（土）13:00～17:40 会場：神奈川大学横浜キャンパス 1号館 308会議室 主催：共同研究グループ「漁場利用の比較研究」および「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」
共同研究グループ 成果発表会（公開） 「ビジュアル資料と渋沢敬三 ーアチックフィルム・写真からの展望ー」	日時：2014年2月22日（土）10:00～17:00 会場：神奈川大学横浜キャンパス 24号館 105講堂 主催：共同研究グループ「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」
第5回国際シンポジウム 「渋沢敬三の資料学 ー日常史の構築ー」	日時：2014年3月9日（日）10:00～17:20 会場：神奈川大学横浜キャンパス 16号館 視聴覚ホールB 主催：国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所

※上記イベントのお問い合わせ先：神奈川大学日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構
TEL：045-481-5611（代） URL <http://icfcs.kanagawa-u.ac.jp>

主な研究活動

運営委員会

2013年度		
第3回	6月26日	2013年度海外提携機関からの招聘研究員について、21世紀COE購入資産の処理およびホームページの閉鎖について、第二期研究成果のまとめについて、『年報10号』編集計画について
第4回	7月25日	2012年度奨励研究者の成果論文の査読分担任について
第5回	9月25日	2012年度奨励研究者の成果論文の査読結果について、2013年度海外提携機関からの招聘研究員について、紙芝居コレクション企画（展示・実演・公開研究会）について、2013年度予算「研究班共通経費」の使用計画について、『ニューズレター』No.31編集計画について
第6回	10月23日	2012年度奨励研究者の成果論文の再査読分担任について、2013年度海外提携機関からの招聘研究員について、2013年度海外提携機関への派遣研究員について、第三期（2014-2016年度）事業計画について、2014年度予算の編成方針について、2013年度第3回公開研究会（租界とメディア班）について、2013年度第4回公開研究会（海外神社班）について
第7回	11月29日	センター長の選任（選出方法・日程）について、第三期（2014-2016年度）事業について、2013年度予算（案）について、2013年度海外提携機関からの招聘研究員について、21世紀COEプログラムのホームページ閉鎖にともなうデータベースの扱いについて

研究員会議

2013年度		
第2回	10月23日	21世紀COE資産の処分について、第三期（2014-2016年度）事業計画について、2014年度予算の編成方針について
第3回	11月29日	センター長の選任（選出方法・日程）について、第三期（2014-2016年度）事業について、2014年度予算（案）について、2013年度海外提携機関からの招聘研究員について、21世紀COEプログラムのホームページ閉鎖にともなうデータベースの扱いについて

研究会

研究班

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究・研究会 6月4日、8月30日、9月13日、9月27日、11月13日
『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編編纂共同研究・研究会 8月17日～19日
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究・研究会 7月30日
東アジアの租界とメディア空間・研究会 7月25日、10月18日
海外神社跡地から見た景観の持続と変容・研究会 7月13日
水辺の生活環境史・研究会 7月19日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究	8月6日～22日	ドイツ・オーストリア	ステファン・ブッヘンベルゲル
東アジアの租界とメディア空間	5月29日～6月1日	韓国	大里浩秋・孫安石
東アジアの租界とメディア空間	8月18日～9月1日	香港	村井寛志
東アジアの租界とメディア空間	11月21日～23日	韓国	内田青蔵
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	5月30日～6月3日	台湾	中島三千男・森武麿
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	10月3日～7日	ミクロネシア連邦	稲宮康人
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	11月1日～7日	韓国	辻子実
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	11月21日～27日	台湾	津田良樹・坂井久能・金子展也
水辺の生活環境史	8月3日～10日	北九州	田上繁・森武麿・安田常雄
水辺の生活環境史	8月26日～28日	大阪	安室知・川島秀一・常光徹・山本志乃・松田睦彦

表紙紹介

紙芝居コレクションの「展示作品一覧」を背景に、『宣戦』（大政翼賛會宣傳部1942）、『滅私奉公』（日本教育畫劇1941）、『大建設』（選挙肅正中央連盟1942）の一部を配して表紙とした。「紙芝居」と「国策」という異質な言葉の結合が発する表出性によるのか、今回の紙芝居の展示会・公開研究会は、異例の好評であった。なぜか、戦時下紙芝居には絵も脚本も健康的なまでに明るい作品が少なくないのである。節約を求められながら、理想の標語に満ちた戦時下の生活は、一面で明るかったという。太宰治の「明るさは滅びの姿」という一文を思い出してしまうが、その実相を紙芝居から探ることも課題になるだろう。

編集後記

今号も、非文字資料研究センターに関する多方面にわたる研究活動の紹介が盛りだくさんありました。アジア都市フォーラムは、日中韓の協定研究所共催で開催され、この研究がより国際化されている事を示しています。本センターが収集した戦中の紙芝居コレクションの公開展示と公開研究会が開かれ、研究会では実演もあって、学内外から大きな反響がありました。また、海外神社班の活動が積極的に展開され、その調査報告も充実しています。共同研究の第2期が今年度で終了します。その成果を期待すると同時に、第3期の共同研究のさらなる展開に期待します。(M.O)

神奈川大学日本常民文化研究所論集30 『歴史と民俗』30

●2014年2月発行予定

〈特集〉 渋沢敬三没後50年

- ・ 解題 渋沢敬三・学問は人間関係の和 (佐野賢治)
- ・ 渋沢敬三の学問、思想と人間形成—前半生の研究 (由井常彦)
- ・ 銀行家 渋沢敬三の横顔 (武田晴人)
- ・ 渋沢敬三における「もうひとつの民間学」(佐藤健二)
- ・ 「漁業制度資料調査保存事業」と日本常民文化研究所 (越智信也)

〈講座〉

- ・ 第16回常民文化研究講座「大津波と集落—三陸の集落に受け継がれるもの」(重村 力)
- ・ 三陸沿岸津波被害と集落復興の歴史と課題 (月舘敏栄)
- ・ どこまでが集落か—津波常習地の漁村集落にみる海の領域意識 (植田

今日子)

- ・ 三陸大津波と漁村集落—山口弥一郎『津浪と村』を受け継ぐために (川島秀一)
- ・ 集落から見た津波被災と復興の課題 (重村 力)

〈一般論考〉

- ・ “間”の民俗—養子制度から沖縄の門中を再検討する (小熊 誠)

〈資料紹介〉

- ・ 閩劇台本『陳靖姑』翻訳之二 (廣田律子)
- ・ イギリス船ベナレス号の遭難事件に見る一八七二—七三年の琉球・奄美—英文史料の紹介 (新居洋子・渡辺美季)

〈追悼〉

- ・ 山口啓二先生を偲んで (山口 徹)

『歴史民俗資料学研究』 19号

●2014年3月発行予定 A5版

●発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

●内容 (予定)

- ・ 舟山群島における漁村の廟の復興・祖先祭祀における女性の活動—螞蟻島を事例として— (于洋)

- ・ 麻疹考—命定めの医療が意味するものとは— (田中美紀子)
- ・ 中日両国の古代年の都市造営に現れた風水思想の比較—隋唐長安城と日本の平城京・平安京を中心に— (黄少博)
- ・ 飛騨の匠の歴史とその信仰 (小林公子)
- ・ 20世紀中国農村における結婚の贈答に関する研究—安徽省黄山市休寧県を例として— (馬路)

租界メディア班・第41回 研究会 (2013年度 神奈川大学非文字資料研究センター 第3回公開研究会) 「東アジアの租界・居留地とメディア」

日時：2014年2月15日 (土) 9時30分～18時
会場：神奈川大学横浜キャンパス 17号館215会議室

プログラム：

開会挨拶：田上繁 (非文字資料研究センター長)
開催趣旨説明：孫安石 (神奈川大学)

【報告】

- 『東亜同文会資料中の租界関連情報』大里浩秋 (神奈川大学)
- 『大連の歴史地図の作成について』木之内誠 (首都大学東京)
- 『天津関係の絵はがきについて』近藤恒弘 (民間収集家)
- 『絵葉書から読み解くハルビンと日本人—ハルビン絵葉書の社会的意味』毛利康秀 (日本大学)
- 『従軍画家たちが描いた戦時中の上海—軍事郵便絵葉書による図版検証』彭国躍 (神奈川大学)
- 『上海人文歴史地図の制作構想について』蘇智良 (中国・上海師範大学) *通訳有
- 『租借と武漢の都市空間・機能の変容』李衛東 (中国・江漢大学) *通訳有
- 『横浜居留地の建築について』内田青蔵 (神奈川大学)
- 『横浜の外国人居留地—上海租界との比較を念頭に』斎藤多喜夫 (横浜居留地研究会)
- 『上海韓人の国際認識』金承郁 (韓国・ソウル市立大学) *通訳有
- 『ソウルの外国人居留地の形成について』金濟正 (韓国・ソウル市立大学) *通訳有

【コメント及び質疑応答】

コメンテーター：

栗原純 (東京女子大学)、村井寛志 (神奈川大学)、中村みどり (早稲田大学)、石川照子 (大妻女子大学)

※内容は変更になることがあります。

お問い合わせ先は、非文字資料研究センター
TEL:045-481-5661 (内線3532)

2013年度 神奈川大学非文字資料研究センター 第2回公開展示・第4回公開研究会 「海外神社とその跡地の持続と変容(仮)」

【公開展示】

期間：2014年3月24日 (月)～3月30日 (日)

参加自由
事前申し込み不要

会場：サブウェイギャラリーM

主な展示：古写真、古絵図、現状写真、復元3D動画

【公開研究会】

日時：2014年3月29日 (土) 13:00～17:00

会場：KUポートスクエア (神奈川大学みなとみらいエクステンションセンター)

内容：海外神社の実態は必ずしも明らかではない。台湾神宮や朝鮮神宮などの海外神社を取り上げ、その実態、戦後の変容、さらには変容に至る背景について考えていきたい。

報告：『台湾の神社とその跡地について』黃士娟 (国立台北芸術大学)
『戦後台湾における神社建築の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について』林承緯 (国立台北芸術大学)
『解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について』諸葛衍 (神奈川大学大学院 院生)
『台湾神宮の消長と地下神殿』津田良樹 (神奈川大学)

※詳細は、開催1か月前にホームページでご紹介します。
※タイトル・内容は変更になることがあります。

お問い合わせ先は、非文字資料研究センター
TEL:045-481-5661 (内線3532)

非文字資料研究 No.31

発行日 2014年1月31日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター
日本常民文化研究所

Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

